

市民参加懇談会 in 松江

原子力 ～知りたい情報は届いていますか～

議事録

1. 日 時：平成18年12月6日（水）17：30～22：45
2. 場 所：松江テルサ 1階テルサホール
3. 出 席 者：木元教子座長  
（ご発言者）青山修一氏、安達慶太郎氏、杉谷 肇氏、曾我部國久氏、高田 純氏、  
高山幸子氏、広瀬 徹氏  
（参加コアメンバー）碧海酉癸氏、浅田浄江氏、新井光雄氏、井上チイ子氏、小川順子氏、  
東嶋和子氏、吉岡 斉氏、中村浩美氏（司会・進行）  
（原子力委員）近藤委員長、齋藤委員長代理、町委員、前田委員  
（内 閣 府）牧野企画官、西田補佐
4. 議 題：1. 開催趣旨説明  
2. 第1部 市民の方（事前に依頼）からのご意見発表  
3. 第2部 会場参加者からご意見発表
5. 配付資料：  
市民参加懇談会 in 松江プログラム  
市民参加懇談会の活動について  
アンケート

○事務局 それでは、定刻となりましたので、市民参加懇談会 in 松江を開催させていただきます。

初めに、本日まで参加の方々をご紹介させていただきます。

まず、地元からのご意見を発表していただく方々をご紹介いたします。

本日は7名の方にお越しいただいております。

松江市在住、青山修一さん（拍手）

鹿島地域協議会教育福祉部会長、安達慶太郎さん（拍手）

平和フォーラムしまね代表、杉谷 肇さん（拍手）

出雲科学館館長、曾我部國久さん（拍手）

札幌医科大学医学部教授、放射線防護医療研究会代表世話人で、松江市民大学の講師をお務めになりました高田 純さん（拍手）

松江くらしといのちのネットワーク代表、高山幸子さん（拍手）

松江商工会議所青年部直前会長、広瀬 徹さん（拍手）

続きまして、原子力委員会市民参加懇談会のコアメンバーを紹介いたします。

本日、司会・進行をしていただく科学ジャーナリスト、中村浩美さん（拍手）

消費生活アドバイザー、碧海酉癸さん（拍手）

WEN（ウイメンズ・エナジー・ネットワーク）代表、浅田浄江さん（拍手）

エネルギージャーナリスト、新井光雄さん（拍手）

生活情報評論家、井上チイ子さん（拍手）

Women In Nuclear-Japan会長、小川順子さん（拍手）

ジャーナリスト、東嶋和子さん（拍手）

九州大学大学院比較社会文化研究院教授、吉岡 齊さん（拍手）

最後に、市民参加懇談会座長である原子力委員会委員、木元教子さん（拍手）

本日は会場に原子力委員会委員が参加しておりますので、紹介いたします。

原子力委員会、齋藤委員長代理（拍手）

町委員（拍手）

前田委員（拍手）

なお、近藤委員長は公務の関係上、第2部から参加の予定となっております。

それでは、これより先は木元座長、よろしく願いいたします。

○木元座長 木元でございます。今日はお忙しい中、お集まりいただきまして本当にありがと

うございました。感謝申し上げます。

まず最初に、この市民参加懇談会の座長を仰せつかっておりまして、そのことをお話しいたします。

私は9年前に原子力委員に任命されました。5人の原子力委員の中で民間人、しかも初めて女性で、非専門家の立場で参加させていただいております。

委員会に入りましたときに、市民と直接普通の言葉で原子力を語る場がないということに気づきました。いわゆる世の中ではコミュニケーションをとりましようとかと言っておりますけれども、原子力と市民とがコミュニケーションを果たしてうまくとっているのだろうか、そのことを痛感いたしました。例えば原子力の政策を策定するプロセスにどれだけ市民の声が反映されるのか、また反映されるとすればどういうシステムを通じてそれを反映させることができるのか、そういう思いがありまして、委員になりましたのが平成12年になりますけれども、そのときにこの市民参加懇談会のようなものをつくりたいということを提案いたしまして、平成13年に立ち上がりました。平成14年には第1回のフォーラムを新潟県の刈羽村で開催させていただきました。そのときは、老人福祉センターの2階で、みんなひざを突き合わせて懇談をさせていただきました。

そのときに考えましたのは、手づくりでいこうと。今日も私たち4人ばかり早目に来たコアメンバーは名札の入れ換えとか、テーブルクロスの張り替えとか、そういうこともいたしまして、大変楽しくやらせていただいておりますが、それはすべてこの市民参加懇談会の精神につながっています。ですから、第1回のときから、例えば次回はどこで開催しようか、今問題が起きているから東京でやろうとか、今回のようにこの地域ではまだやったことがないから、原子力のことについてみんなのご意見を広く承ろうとか。刈羽村の場合はあちらからオファーもありました。

また、いろいろな地域、福岡や北海道で開催しましたがけれども、その都度私たちここにおりますコアメンバー、今日のご欠席の方もおりますけれども、コアメンバーがこういう地域でこういうテーマがある。こういうオファーがある。それにはどういう人たちをお呼びするか、公募にするか、どの時期で、どういう時間帯で、どういう場所で、何人ぐらいでなど、そこまで徹底的に自分たちで検討します。そのときには、地元の方のご意見を逐一伺ったりします。今日のような場合も地元からご意見を伺わせていただいて、ご意見をいただく方は10人がいいか、8人がいいか、たまたま7名になりましたけれども、いろいろなお立場の方に来ていただくこと、そういうことでご参画をいただいているわけでございます。

こういうふうに、普通の感覚と言葉で原子力を語るということが今までなかったもので、これは継続して、恒常的に、いつでもどこでもできるという形をつくっていきたいと考えておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

今日のテーマですが、原子力についての情報はいろいろ出ておりますけれども、それが本当に知りたい情報であり、皆様のところに届いているのか、届いていないのか。また、届いていてもそこにはどんな問題があるのだろうか。そして、皆さんの方から発信をする場合には、どのようなネックがあるだろうか、そんなことも含めて、自由にご発言をいただきたいと思ひます。会場にもお配りしております資料がございますが、市民参加懇談会のことは、1ページから書いてございます。市民参加懇談会の活動についてということで、平成14年に刈羽村での開催から始まって、2ページ、3ページとありまして、4ページのところに市民参加懇談会について、活動の目的と内容のご説明というのがありますので、それは後でお読みいただければ大変幸でございます。

そこで、原子力基本法というのがありまして、そこでは民主的に運営していかなくやならないし、また原子力の研究開発、利用については、自主、民主、公開の原理で進まなくやいけない。そして、昨今いろいろ核兵器のことなど言われておりますけれども、原子力基本法にはきちんと原子力の利用は平和に限ると限定されているわけです。そのこともこういうときにきちんと踏まえてお話をさせていただければありがたいと思ひます。

私は9年間これで原子力委員を務めさせていただきました。けれども、原子力、それから原子力委員会、これは見える、逃げない、活動する。これをモットーでやっておりますので、今回もその流れの一つだとお考えいただければと思ひます。

いろいろ申し上げましたけれども、本当に自由に、そして何でも結構です。ご意見を賜り、またこのコアメンバーと意見を交換していただければ大変ありがたいと思ひますので、今日はよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございました。会場の方々もよろしくお願ひいたします。

ありがとうございました。(拍手)

では、中村さんお願ひ致します。

○中村コーディネーター それでは、市民参加懇談会 in 松江を開会させていただきます。今日司会・進行を担当いたします中村浩美です。よろしくお願ひいたします。

第1部では、ご紹介のありましたあらかじめお願ひをいたしました発言者の皆さんからご発言をいただきながら意見交換をしたいと思っております。

第2部の方では、今日お集まりいただいた会場の皆さんからも直接ご意見やご質問をいただきながら、意見交換ができればと思っておりますので、8時半ぐらいの終了予定であります。ちょっと長い時間になりますが、どうぞ最後まで積極的にご参加いただければ幸いです。

それでは、第1部です。

今日のテーマは原子力 ～知りたい情報は届いていますか～ということなんですけれども、皆さんにとって知りたい情報とは何のなのか、それが届いているのかどうか、そのあたりをお聞かせいただければと思います。

それでは、あいうえお順で恐れ入ります。青山さんはきっと小学校のときからずっと1番に当てられていたと思いますけれども、青山修一さんからお願いいたします。

○青山氏 松江市在住ということで、今回恵曇漁協の方から話がありました。私は松江市の新参者でして、原発の町であります鹿島町に生まれ育ちまして、家の方が魚の卸売業をやっているものですから、ぜひ若い者でと若くもないんですけれども、出てくれということで今回お邪魔をしたんですが、余りにも自分に知識がないのにここにいてちょっと恐縮をしているんですが、鹿島町に住んでいるということで、いろいろな情報が入ってきているはずなんです、多分普通に全然原発に関係ないところにおられる人から見ると、電力会社の方からも国の方からもいろいろなパンフレットが届いたり、手に入りやすかったりという意味では、いろいろな情報に触れて、いろいろな情報を知ってなきやいけないんですけれども、実際今回こういう機会をいただいて、どういう話をしようかなと考えたときに、情報が余り頭の中に残ってないなということを感じました。こういう場でお話をさせていただくにふさわしくないんじゃないかなということで、一応ご辞退のお話もさせてもらったんですけれども、一般市民というか、そういう形での参加も必要だから、ぜひ出てくれということで、今回お話をさせていただきます。そういう意味で例えば原子力発電に賛成か反対かと言われても、それを堂々と賛成ですとか反対ですとかと言えるだけの情報すらないというのが実情です。

ただ、そういう中でも自分なりにどう考えるか、原子力とかエネルギーとかということについてはいろいろ考えたりはするんですけれども、どうしてもちょうどスパイラルのように、どんどん情報がふえてくると反対側に行ったり、またどんどん情報がふえてくると賛成側に行ったり、どんどん、どんどんいろいろな情報が入ってくるたびに賛成かなと思ったり、反対かなと思ったりしながら、少しずつ情報は積み重ねていっていると思うんです。原子力の町に住んでいますので、特に原子力とかについていろいろ考えるんですけれども、核分裂というエネルギーのとり方というのは、今の人間の分相応かといったら、ちょっと手に余るやり方なのかな

というのは感じとして思っております。

ただ、手に余るから反対かということを経験していろいろ考えていくと、太古の原始の人たちは火だつて多分手に余るようなエネルギーだったんじゃないかと思うんです。でも、火を使わなかったら文明は発展しなかったし、そういう意味では手に余るからNGだとかというような意味合いじゃなくて、それが必要な、必要じゃないかとか、いろいろなことを考えていきながら、どうしても意見として最終的にまとまらないというところで終わっちゃうんですけれども、原子力とか核分裂とか中性子とか放射能とか、いろいろなことについて、地元で研修に行ったり、地元の消防団にもいますので、消防団の方からの研修があったり、情報をもらうんですけれども、それが全体の中のどういう情報で、どういうふうに結びつくのかというのを結びつけるのがうまくできてないような気がします。

いろいろな情報はいろいろな立場の人から、その立場に合わさったようなというか、これもいろいろなところから光の当て方で見え方が違ってくると思うので、情報としてはもらいながら、なるべく自分の方向から光を当てて考えようとは思っているんですけれども、その情報はなかなかもとが大き過ぎて、結びつきにくい。数学の公式だったら、公式をそんなにたくさん知らないで、知っている中の公式は結構結びつきやすいんですけれども、原子力の情報ってなかなかきちっと体系的に情報を自分で収集してないからなのかもしれないんですけれども、結びつきにくいというのが今回いろいろと考えてここで話しをする中で、全体の中のこういう形というのがわかりにくい情報なのかなというのが僕の感想でした。

それから、原子力のいいところは環境負荷が少ないんじゃないかなというのは、将来的なプルトニウムの廃棄の問題とかというのはまたあるんでしょうけれども、それ以外のことに関してはものすごく環境負荷も少ないし、例えば太陽電池なんかだったら、洗うために今フロンじゃないんですけれども、何か違うものを使っているんですけれども、いろいろなそういう情報もうまくまとまらないんですけれども、一部としての情報が出てくるものですから、時間にもなってきたんですけれども、そういう感じで、情報はたくさんある中で、うまくそれを結びつける根本的なものという情報がちょっと分かりにくいかなというのが今回いろいろ考えさせていただいた中で、最終的な結論というか、思いであるということをお伝えしたいと思います。

ありがとうございます。

○中村コーディネーター ありがとうございます。お気持ちは非常によくわかりました。また後ほどご発言いただきます。

続いて、それでは安達慶太郎さん、お願いいたします。

○安達氏 松江市鹿島町の安達慶太郎です。

私は現在、昨年の市町村合併に伴い、合併特例法により設立された鹿島地域協議会というところに所属しています。それ以前は旧鹿島町議会に所属していました。そのような経緯から、市町村合併を通して原子力発電所と立地自治体について発言してみたいと思います。

初めに、平成17年、昨年の市町村合併は原子力発電所立地自治体であった旧鹿島町にとって大きな課題でした。3号機増設の準備工事が進む中であって、将来の自治体運営に係る財源の不安も少ない状態で、合併協議の前半は鹿島町当局も、また鹿島町に住む地域住民も、鹿島町は恐らく単独町制を選ぶだろうという意見が大半を占めていたように思います。しかし、合併協議が後半へと移行する平成14年、同じ八束郡の町村でありました東出雲町が合併協議会から離脱を選択する中で、鹿島町は合併協議会に参加し続けました。そして、住民説明会、それから住民アンケート等の実施を経て、最終的には鹿島町議会は16対1の賛成多数にて現在の松江市となる合併を選択したわけです。

鹿島町が合併を選択した要因として、いわゆる旧松江市からのラブコールや市町村合併を取り巻く社会情勢の変化等が挙げられると思いますが、何よりも自分の意見や立場と異なる自治体との合併協議会に参加し続けたことが大きな要因ではなかったかと思います。立場の違いや考え方の違う参加者の中で、さまざまな意見を聞き、さまざまな情報を得る中から、その中から合意点を見出して、最終的には鹿島町の特殊性である、つまり30年来の鹿島町の基本施策、原子力発電所との共存共栄を前提としたまちづくりを合併後の新市においても継承してもらえという鹿島町議会の附帯決議を合併協議会で全会一致にて承認されたことが最大の要因であったと思います。現在の松江市には、旧鹿島町の原子力施策を継承することと同時に、日本で唯一の県庁所在地の原子力立地自治体という特殊性も新たに加わることになりました。

次に、島根原子力発電所については、1号機が昭和49年3月に国産原子力発電所の第1号機として営業運転を開始し、以来平成元年の2号機の運開を経て、現在3号機が建設中であります。また、2号機においてMOX燃料を使用するプルサーマル計画が島根県及び松江市の申請了解を得て、現在経済産業省に申請中であることはご存じのことと思います。

現在の原子力を取り巻く状況は、よい意味で大きく変わってきていると思います。原子力発電所に関する情報は毎日のように新聞紙上で見ることができ、またインターネット上にて各電力会社のプレスリリースやトラブル事例、各地方自治体の手続過程、果てはこのような国の原子力政策に関するものまで、だれでも知りたいと思う情報は簡単に見ることができる状況にあると思います。

特に一般の人にはなじみにくい原子力発電所に関する技術的な検査やトラブル事例の対策においては、原子炉等規制法及び電気事業法の改正に伴う原子力安全・保安院、原子力安全基盤機構の検査体制の充実によって、厳密に実施され、その報道はどのような細かな事例でも公表する透明性も確保されていると思います。

さて、今回の市民参加懇談会～知りたい情報は届いていますか～という題ですが、この～知りたい情報は届いていますか～に以前のように副題はついていないようです。情報を知る人の立場や状況の違いによって、知りたいと思う情報や意見は異なります。また、原子力への知識の度合いや関心の有無によっても、知りたいと思う情報はおのずと違ってくると思います。

最近読んだ本の引用で恐縮ですが、人間は自分が知りたいと思う現実しか知ろうとしないものであるらしいです。このような人間性を踏まえた上で、情報を提供する側である国や地方自治体、そして新聞等のメディアには、原子力に関するあらゆる角度からの知識や公平性、そして異なる意見の併記と歴史を踏まえての将来への展望及び解説が求められると思います。このような意味からも、知りたいと思う意見や情報を知ると同時に、知りたくないと思う情報や意見を知る場所となる今回のような市民参加懇談会 in 松江等の機会の充実が必要であると考えます。原子力に関する市民参加懇談会には、積極的な情報提供と、そして原子力に関する解説の場であり続けてほしいと願い、私の発言を終わります。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

続いて、それでは杉谷 肇さん、お願いいたします。

○杉谷氏 平和フォーラムという肩書をつけていただいておりますが、具体的に言いますとフォーラム平和人権環境しまねということでございます。全国の仲間とともにさまざまな立場で運動をしておるわけなんです、身近なところではアジア、アフリカの子供たちに対して何とか手を差し伸べようということで、子供たちと一緒に島根県でもあちこち休耕田が広がっておりますので、そういったものを借りてお米をつくって、2月には横浜の港からカンボジアの方へ送ろうと、そういうふうなことも一緒にやっておるわけなんです、私どものこのフォーラムというのは、国連が1994年に提唱しました人間の安全保障という立場で運動しておるわけなんです、その中で問題になるのは今日の表題にもありますように、あらゆる我々国民、市民のための情報提供をぜひともお願いしたいと。

冒頭に木元座長がおっしゃったわけなんです、この原子力につきましても平和利用に限るんだぞということを強調していただいたわけなんです、最近の閣僚の発言の中にも国是であるところの非核三原則を打ち破ってでも、日本独自の核開発もすべきだというふうな恐ろしい



発言もあるわけですし、そういうふうな意味からも、ぜひともこの原発、原子力に関する情報を具体的な正確な情報を出してほしいというのが我々の気持ち、国民全体の気持ちではないかなど。そういった情報を出していただければいただくほど、この原発に対しても中国電力に限らず、東京電力の今日の新聞なんかを見てもいろいろな不祥事、データ隠しがあるわけなんです、そういった国民の不安を取り除くためには、ぜひともこの情報公開をお願いしたいというふうに思っております。

なお、具体的に島根県はお二方の発言にもありますように、県庁所在地に唯一の原発がある47都道府県の中でのこの松江の意味合いというものを考えた場合において、2号機でプルサーマルを導入と。県は去年の11月でしたでしょうか、懇談会ということで、委員の方々での話し合いの場をつくってくれたわけなんです、残念ながら私どもの市民、県民の声が届いてないと。今日もお出かけの吉岡先生、3月に松江市に来ていただいて、その懇談会で話された部分を傍聴させてもらったんですが、県は4月にばたばたと3回やって、合計で9回終わりましたと、県民のニーズを集約しましたということでもって、国に対してこの安全審査の了解のゴーサインを出したと。松江市においては、ありがたいことに35の公民館で懇談会をやる。それから、全国でもまれだったんですが、シンポジウムをやってくれたと、そういうことでもって出てきた市民、県民の疑問点を集約して、委員の方には原子力委員会に対しての3つの項目を載せておりますが、これはつい最近松江市の市報で全国に配られた分です。

このシンポジウムだとか、公民館での検討の場でもって市民から寄せられたいろいろな疑問点、安全委員会ですとか、今のエネルギー情報ですとか、原子力安全委員会に対しては各国のMOX燃料の使用だとか、我が国の安全評価検討範囲、反応炉事故及び冷却水喪失事故に関する判断基準だとか、さまざまな質問事項を投げかけております。ぜひとも国の機関として責任を持って、正確な正しい情報を我々島根の県民に、市民に提供いただきたいというふうに思っております。

私どもは独自行動を行う中でもって、県がそういうふうないいかげんというのは何ですが、早々と結論を出すような動きが見えたものですから、アンケートをとらせてもらいました。3,000名の所帯に対して、無作為抽出でもって行いました。回答が746人の回答をいただきました。委員の方々にはその主なデータを紹介させていただいておるわけなんです、この行政の安全対策、避難方法について、避難方法は余り知らないとか、全く知らないというのが実に80%の方々の回答です。

プルサーマル計画についても、知っておるという方が72%なんです、この中身で具体的

に理解できたかという、これが71%の方々が余り知らない、全く知らないと。回答いただいた四百何名かの方々はありがたいことにほとんどコメントを記載していただいておりますよ。その中で出てくるのが中国電力ですとか行政機関の説明会やPRチラシは安全だけが強調され、リスクについての説明がないと、こういうふうな意見が、それは中には賛成の方も当然おられるわけなんですけれども、心配としてこういったデータも出てきております。こちら辺を行政として、国としても、県、市町村としてもどういうふうにしてとらえるかということが大きな課題ではないかなというふうに思います。新聞をにぎわせております地震の問題につきましても、本当に正確な情報を我々県民に対して提供してほしいなど。

ちょっと時間も来ておるようですが、この間10月31日に名古屋大学で日本地震学会の発表会があったわけなんです、この島根半島におけるところの活断層の問題について、大学の先生が発表されております。その中のコメントとして、中国電力による活断層調査では、鹿島断層は8キロメートル程度の短い活断層であるとされ、明瞭な断層変位地形の多くが無視されている。これらの研究調査結果は今日お出かけの原子力安全委員会において審査されたが、中国電力側の調査結果が追認されてしまったという論文の内容でございます。

ぜひとも第三者機関なりで十分なる調査をしていただいて、我々に情報を提供していただきたいと。現在、調査されておるのが中国電力の関係の業者の方々がこの活断層調査をしておられるわけなんです。ぜひとも国なり第三者機関でお願いしたいと。正確な情報をぜひとも私どもに提供していただきたいというふうに思います。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

一つだけちょっと確認ですが、原子力委員は今日来ておりますけれども、原子力安全委員会ではございませんので、またこれは別の組織でございます。ただ、原子力委員も十分に原子力安全委員会のことは承知をしております。また、後ほどご意見あれば意見交換させていただきたいと思っております。

続きまして、曾我部國久さん、お願いいたします。

○曾我部氏 曾我部と申します。

私は3月31日まで大学で教鞭をとっております、出雲科学館の館長というのは4年前から大学現職時代からやっております。この知りたい情報が届いていますかという設問なんですけれども、これは私たちに必要な分は十分届いていると。ところが、かなりそういう知らなくてもいいというか、知りたくない人にとっては当然いかないわけで、私たちはこういう原子力というか、放射線というものに関して非常に身近にあるし、仕事の関係上あったために、そ

れは当然とらなきゃいけないし、自分で虎穴に入っていくという感じをしております。しかし、知りたくない人にとっては当然届かないだろうし、新聞で広報を出されたとしても、これは十分に波及していかない部分があるんじゃないか。

私は今出雲科学館の館長をしながら、全国に出前実験というのを二十数年やっております、そのときに学校現場でつくづく思うんですけれども、子供たちが間違っただけを提供されているというふうに思うんですよね。これは原子力委員会、あるいは政府としてもきちっとした知識を子供たちに伝えないと、間違っただけで育ってしまうというケースがあるんじゃないか。私がたまたま出会った子供の数というのは非常に少ないんですけれども、そういう子供たちに教育現場を通じてきちっとした情報を提供していただければ、もっともっと正確に認識して、いろいろな議論の土壌ができるのではないと思うんですけれども、今情報というのはある意味でワンウェイなので、結局リアクションがないというのが問題だと思うんですよね。

私たちは子供の前で核融合の話をする。小学校1年生の子供の前で核融合の話をする。最初は何のことかわからないんですけれども、核融合、核分裂という言葉にならすことで初めて理解してくれる。それから、みんなは怖いから触らないようにしようという情報もそうで、安全性以外は余り関係ないから自分たちが触らないというように思っている分野があるんだと思うんですけれども、そうじゃなくて、怖いからこそ触ってみる、あるいはそれによってどういう危害が起こるのかとか、それを初めて知ることによって防止策が出てくるわけです。科学技術も絶対安全というものはあり得ないわけですし、その絶対安全性ということを神話化するために、隠さなきゃいけない情報とか、あるいはいろいろなデータを改ざんしなければいけないというような問題が出てくるのではないか。もっとオープンにいろいろな安全性とか、そういうものについても話し合うか情報を流すということは必要だろうと思うんです。そういう面で、学校現場ではかなり偏った形の情報が流れているんじゃないかというのが私が感じるところであります。

エネルギー環境フォーラムとか、あるいはいろいろな教育環境センターからの情報があって、それを見ている方はまだいいと思うんですけれども、ほとんどの方が見ていらっしやらないから、かえって原子力は怖いとか、そういうような情報だけが流れてくると。確かに、怖いんですね。怖いからこそ、自分がその安全性について技術を磨き、そしてその対応策を練っていくことが科学技術の進歩になっているということをそばに置いてしまって、安全性、危ない、危ないという話ばかりをやってしまうので、これが子供たちの中にはかなり意識的に浸透してきておりました、科学も水素は非常に怖いとかといって実験をしない先生がいっぱいいるわけで

すけれども、水素の実験をさせることで、扱い方でこんなに違うんだというようなことが子供たちに分かってくる。

そういう情報も提供していかないと、今余りにも偏った情報だけを提供して引き出そうとしている方が結構いらっしゃるかなと思って、そういう面では安全性のことばかりでは、それは確かに私たちの身の回りの安全性というのが一番関心度が高いんですけども、そればかりではなくもっともっと危険なものというのは原子力よりもっと食の方がもっと怖いというものもいっぱいあると思うんですけども、そういうような余りちょっとこういう比喻はよくないんですけども、そういうことを考えていくと、科学技術で原子力をつくり出したのであれば科学技術で解決できるはずなんです。

そここのところをもう少しきちっとした情報提供をしていく方が政府としてもいいんじゃないかという、こういう懇談会を開いていただいて、我々の意見を聞いていただくというのは非常に進歩したと思うんですけども、そういう面で市民の声として、我々はかなりな情報を得ることが出来ますけれども、もっともっと広い情報をもっとわかりやすく提供していただければ、子供たちのレベルから正しい情報をして、そして成長するに従って、これがいいことか悪いことかということが判断できる。そういうようなところを育ててやればいいことではないかと思うんです。それが余りにも育てない子供に偏った情報だけを提供するというのが少し起こってくると、これはある意味では洗脳という言葉なんですけれども、これは非常に怖くなるので、それの方が危険度が大きいと思うわけで、私たちは教育現場にいるので、原発賛成、反対というんじゃなくて、エネルギーなくして生活ができないということを考えていって、その点から科学技術によって解決できるもの、解決できないもの、マンパワーの必要性というか、そういうものまで言及するということが必要ではないかと思っております。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

ここまで4人の方にご意見をお伺いいたしました。大変皆さん明確なご意見をお持ちでありありがとうございます。

ここでちょっとコアメンバーと意見交換をしてみたいと思いますけれども、コアメンバーの方、今ちょうど拝見していると、今の特に曾我部さんのご発言に新井さんも大学で教えていらっしゃるお立場なので、頷いていらっしゃいましたが。

○新井委員 臆面もなくジャーナリストをやつつも、大学の方でエネルギー論という講座を持たせてもらいまして、4年も過ぎているんですけども、これは原子力に限ったことでなくて、全体の一つに石油も全部やるんですが、私はそもそも経済部なものですから、余り理科的

な話にはできないはずなんですが、教えて一番困るのが原子力の話なんですね。メタンが燃えるとか、何が燃えるというのは比較的化学反応ですからわかるんですが、核反応になるととたんに難しくなってしまうらしくて、私の理解ももちろん大した理解ではないんですけども、一応のメカニズムすらもなかなか理解してもらえませんで、ですから大体私は1.5時間ですから3時間ぐらいそれに費やすんですけども、それでも通じませんので、どうしても先ほど先生おっしゃったように、危険であるとか何とかという感性的な情報だけが物すごく学生に伝わっていきまして、大体毎年アンケートをとるんですが、賛成、反対でとると、これも本当に奇妙なぐらいに半々ぐらいになるという感じでした、授業を終えてから一、二割の人がこれで納得できましたのでというふうになってくれるんですが、その辺のところ、私の生徒は50人からそのぐらいしかいませんから、そのぐらいの範囲で全然いいわけないわけでした、先生おっしゃるとおりに新聞やら雑誌やら、いろいろ見れば情報が相当にあるはずなんですが、関心を持って見ない以上は一体どんなにたくさんあったところでなかなか難しいんだなと思ひまして、非常に同感して聞いたわけです。

○中村コーディネーター 吉岡委員、どうですか。

○吉岡委員 松江市には1月に来たんです。3月ではないのです。いま4名の方に話していただきました。知りたい情報を具体的に挙げたのは杉谷さんだけで、ほかの方はどうもやや抽象的な議論だったので、その点はできれば今後発言される方はあなたは何を知りたいか、知りたいけれども、伝わってないのは何かとか、そういう見地でやっていただきたいと思うのです。杉谷さんのポイントの中に第三者機関で調査をやれというような提案があって、私もそれは大賛成です。具体的にどうやるかについては、見解の異なる複数の研究グループ、できれば国際的なグループに委託をして、立場が異なるからそれぞれ違った結果が出てくるのですけれども、それぞれについて発表会と徹底した裁判形式の討論会とか、例えばそういうものをおやりになるのはどうか、それは大変だけれども、3時間で終わるような、一人当たり一、二回しか発言できないような会ではなくて、じっくりやるというのはいいいんじゃないか。私自身も大いに共感いたしました。

○中村コーディネーター 何か自己批判というか、コアメンバー自身の反省も込められていたような気がします。

ほかの委員、いかがですか。

碧海さん、どうぞ。

○碧海委員 安達さんにお伺いしたいんですが、人間は自分の知りたいものは知ろうとしない

という、最後に知りたくないと思う情報についてもこういう会は役に立つというふうにおっしゃったのでしょうか。

一つ私の方からさらに伺わせていただきたいのは、原子力とかエネルギーについては、たとえ知りたくないと思われても知ってもらわないと困るという情報もあるわけですね。そういう意味で、どうしたらいいのかということをごさらにちょっと伺いたいと思います。

○中村コーディネーター 安達さん、お願いします。

○安達氏 発言内容がどうしても抽象的になってしまって申しわけなかったんですが、この機会、特にこの市民参加懇談会、発言は自由ということで、今回も全く自由と、知りたい情報は届いていますかという題名はついていますけれども、発言内容は自由ですよ。全く拘束がなかったですね。ですから、こういう機会に出れば当然賛成の立場の方も、それから反対の立場の方も、それからはっきり言えば大多数のサイレントマジョリティ、関心のない方もそれぞれが参加されます。

そういう自分の例えば賛成の人から見れば、原子力の有効性であるとか科学利用であるとか、そういう面は聞きたい情報です。もっともっと深く知りたい情報です。反対の立場から言えば、恐らく耐震性の問題とか、それから不正等の問題、こういうものは知りたい情報でしょう。それから、多くの声のない、余り関心のない方にとっては、こういうちょっと時間を拘束される会自体が多少苦痛ではないかと思うんですが、そこにあえて意見の異なる三者が全国各地で集まって、必ず自分の知りたい情報を聞いて、情報の回答を得ることも重要ですけども、ほかの発言者の方から高度な知識の情報、自分は高度な知識は嫌いだよという方も聞かざるを得ない。あるいは一般のこの地域に在住している大多数の人間、これは原子力に対して賛成も反対もそこまでの意識はなくて、それから関心もそこまで高くないんですよ。核分裂がどうか、それから原子力基盤機構がどうか、それからFBRがどうか、そういう言葉を並べられただけでもちょっと頭が痛くなるというのが普通の人だと思うんです。しかし、その普通の人々もこうして参加して、専門的な方々の話を耳に入れる中から何かをつかみとっていくと、自分とは異なる考えの人の中に自分を置いて、必ずその中からご意見を見出すということは大切ではないかという趣旨で発言させてもらったんですが、お分かりいただけでしょうか。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

小川さん。

○小川委員 私は吉岡先生と違って、それぞれの皆様方がそれぞれ日ごろ思っていることを本当に気持ちのままにお話しただいて、大変よかったですと思います。杉谷さんのご意見

は非常に具体性があったということは評価しますし、ほかの皆様方は普通に生活してらして感じていらっしゃることをそのままおっしゃる。そのことを私たちが聞くということも、市民の皆様方の意見一つ一つというのがこれは重要なことなんでしょうと思っています。ですから、ご発言いただいたことは大変ありがたいことだと思っております。

それで、質問は杉谷さんの大変な労力を要するであろうと思われるアンケート調査をされていらっしゃるんですが、これは電話のアンケートでいらっしゃいますか、それとも文書のアンケートを郵送で出されたんですか。

実は私どもはアンケートをよくとりたいと思うんですけども、現在個人情報というのは非常に厳しい扱いになっています。3,000人の方々の住所を持っていらっしゃるということですが、今私は電話かなと思ったんですけども、大変びっくりしたんですけども、これはどういう方が対象者ということになるんでしょうか。多分、ランダムにするのは今個人情報の保護の観点からできないんじゃないかなと思いましたので、ちょっとその点興味を持ちました。

○中村コーディネーター 杉谷さん、いかがですか。

○杉谷氏 今、おっしゃいましたように、個人情報の件で非常に難しくなっておるわけなんですけど、いろいろかつての電話帳あたり、住所も載っておりますので、そういうふうなものから無作為で3,000名の方々を抽出して送らせていただいたところでございます。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

後ほどまたご意見でも、井上さん、手が半分挙がっていますね。

井上委員。

○井上委員 簡単に曾我部さんにお聞きします。

私たちが子供たちといろいろ学習をしているんですけども、出前講座の学習の中身はどんなことをされるのか、年齢によっては内容もちょっと違うのかなと思います。一番大事にされていることは何か出前講座のことを聞かせていただけたらと。

あと青山さんが最初に何か言葉がいっぱいあるけれども、それがなかなか一つにまとまらなくてというお気持ちは、私たちが少しずつ、少しずつ勉強していくときのそのままのお気持ちだったので、すごくよくわかりました。

それだけです。

○中村コーディネーター 曾我部先生、お願いします。

○曾我部氏 私は子供たちの前で2時間ほど実験をするんですけども、まず最初にこれは私自身が27年前にアメリカに呼ばれて、NASAでちょっと仕事をしたときに、ヘリウムガス

で声が変わるといふか、なぜヘルメットをかぶって通信したときの自分の声が違うんだらうと  
というようなことから実験を始めたきっかけなんですけれども、そのヘリウムというのがどうし  
てできたかというのが水素の核融合でということ、宇宙は水素とヘリウムしかないんだと。  
だから、空気のない世界に行くと声が変わるんだよという話からずっといくので、核融合の話  
抜きにしゃべれないんですよ。

核融合という言葉を使うと、子供にとっては初めてですから非常に難しいように思う。とこ  
ろが、子供というよりも初めてのときはだれでもみんな1+1だって1という数字を聞くまで  
はわからないわけです。1+1が1の子もいるし、2の子もいるんだけど、なぜ2になっ  
てくるかというところをわかっていくように、何回かやっていくうちにわかってくる。それが  
正しい知識につながってくるわけですね。だから、そこは難しい言葉を私は使うことで、断り  
ながら使って、そしてだんだんと上げていって、そのときに太陽の核融合でできたのが私たち  
の体でもあるし、ウランでもあると。それから、ウランがそういうふうにはでき過ぎて、中性子  
が多くって頭でっかちになっちゃって爆発してしまうんだよねという話まですると、その理由  
がわかる。だから、核融合と核分裂というのは作用と反作用の話なんですよね。だから、難し  
いことじゃない。

核反応というと非常に難しいように思うかもしれないんだけど、そんなんじゃないでた  
だ単にけんかしているんだというような子供たちのとらえ方で十分だと思う。そういうところ  
から、エネルギーが利用されて私たちが地球上に生命があるということを認識すると同時に、  
宇宙でウランがあったから地球が暖かいんだとか、そういう話までしてくるので、それをどう  
やって科学的に利用するかという話になってくるとちょっと難しいので、これは高校生のとき  
にしか話をしない。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

それでは、また後ほど意見交換の時間を設けますけれども、続いての発言者の皆さんのご意  
見を伺ってまいります。

続いては高田純さん、どうぞ。

○高田氏 原子力 ～知りたい情報は届いていますか～と、こういう本日の懇談会の主題が与  
えられたわけですが、これに対して私が私なりに今の日本はこうした方がいいのかなというよ  
うな、そういった意見を話したいと思います。木元教子さんが最初にこの会の趣旨をお話しし  
てくれて、コミュニケーションは非常に大事なんだと。私も常日ごろそう思っています。今日  
の懇談会の趣旨というのはそこにあったので、政府が行う、原子力委員会が行う、まさにコミ



コミュニケーションの見本のような集まりで非常に頼もしく思っているわけです。

ただ、日本人社会というのはコミュニケーションが苦手な社会です。結局、うまくコミュニケーションができていないと思うんですね。だから、そこをどういうふうに変えていくかということが日本の課題かと思っています。

発言者からありましたように、知りたい情報というのは結構届いてきます。積極的な人はさらに調べて、すぐにはいかないにしても少しずつ情報が手元に来る。これは日本の原子力基本法の3原則のうち、公開性というのが非常に徹底しており特に進んできました。情報の公開性、透明性というのが非常に功を奏して、情報は入手可能と、私はそういうふうに見ています。

ただしというところがあるわけですが、どちらかというとなんか普通は情報というのは上から下へと、あるいは原子力に関してはこういった地域では県もあるんですけども、県や電力会社から住民への一方通行の情報ということが多いと思います。今日もそういったご発言もあったかと思うんですけども、それで今の日本では特にまた原子力に関してですけれども、日常的なコミュニケーションがうまくいっていないのかなと、そういうふうに感じています。その原因は何かと難しいんですが、電力業界が非常にまじめにやっていたらしゃるのとはわかっています。ただ、まじめ過ぎて肩を張り過ぎているのかなというふうにも感じています。

私は放射線防護というのが専門なんですが、そういう学会もありまして、特に原子力の人たち、原子力分野から参加する放射線防護の専門家たちは、よく言うのがリスクコミュニケーションと言っていますね。コミュニケーションにリスクとつけるあたりから、私はちょっとおかしいなと常に思っているわけですが、何かにつけコミュニケーションのテーマが危険度というか、安全の議論がコミュニケーションのテーマになっている。これはちょっと普通じゃないと思うわけですね。そうじゃなくて、原子力に限っていても利益と不利益というのがあるわけで、利益の議論もあるわけです。したがって、原子力といえども普通のコミュニケーションをしないとイケない。ですから、原子力のテーマでも普通のコミュニケーションをうまくやってほしいと思います。ただし原子力と関係ないほかの産業に比べて原子力が特に悪いのかというとも悪くないと思います。原子力はほかの産業に比べてコミュニケーションができていないとは思えません。どちらかというとなんかコミュニケーションをとろうと努力をしているのはよく見えます。

それで、私が非常にうまくいっているんだなと思ったのが2003年のフランスの調査の時です。日本では今青森県の六ヶ所村に再処理施設をつくって、核エネルギーの燃料のリサイクルを目指しています。これは私の専門テーマじゃないんですけども、核燃料のリサイクル、

フランスがもともと先行した国なんです。そこがうまくいっているのかどうか、その調査が目的だったんですね。

それで、フランスの核燃料再処理施設というのはフランスの北の方にあります。「シエルプールの雨傘」って映画をご存じですか、あの「シエルプールの雨傘」のシエルプールという向こうで鉄道の終点から車で行ける場所に再処理施設があります。日本の施設が北の方にあるのと偶然かもしれませんが、そういう有名な土地に近いところなんです。そこに行って驚いたことは、その再処理施設にはコミュニケーションという部署があるんです。日本だといろいろな会社に広報部があつて、市民対応とか、お客さん対応とかあるわけですが、ここは広報じゃなくてコミュニケーションという担当部署があります。そこで一生懸命に説明して下さった方が元市長でした。その施設を含むところの市長だったというのでまた驚きました。市長というのは市民やいろいろなところのお話をするのが主な仕事で、それを取りまとめていくわけです。だからいろいろな人とお話するのに長けた人です。だから、市民の気持ちをくんで、何を知りたいのか、そういう知りたいものに対して答えるのです。そういうコミュニケーションを積極的にやっている。

そういうことで、ここでは地域へ出向いて普通の質問に答える。もともとあらかじめ用意されたシナリオを説明に行くんじゃないということです。コミュニケーションってそういうことなんだなと思いました。

あともう一つ言いたいのは原子力医療です。これには地域の病院、あるいは医師の協力が不可欠です。これは島根県の方々もそういうふう思われているのですが、フランスではそれが実現しているというのでびっくりしました。驚きました。日常的に地域の医師たちと原子力発電所の医師、あるいは放射線管理部との交流がフランスでは実現しています。島根県でもヨウ素剤というのを備蓄していると思うんですけども、事前配布はされていません。フランスでは事前配布をしています。ですから、どうなるのかなど。フランスでは主治医というのがしっかりしてまして、主治医の皆さんが地域の人たちにヨウ素剤の説明をきちっとできています。だから、事故が起こって初めて動き出すんじゃなくて、ふだんからヨウ素剤の説明がされる状況にあります。ヨウ素剤を受け付けにくい体質の人もいるわけです。今の日本ですと、お役所の人が配って、お役所の人は医療と関係ないですから説明はできません。そういった問題を日本は抱えています。

そういうことで、日本はフランスの再処理などの技術面だけじゃなくて、フランスの進んでいるそういったコミュニケーションとか、それから安全にかかわる部分、そういったことも学

んでいく必要があるなと思います。

それと、知識に関しては島根県ですと医にかかわる部分は地域の医師、あるいは専門家の協力を恒常的に得ることが安心につながるのかなと思っています。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

新鮮な情報をありがとうございました。

続きまして、それでは、高山幸子さん、お願いいたします。

○高山氏 原子力についての知りたい情報は届いていますかというこの質問なんですけれども、私は届いてないと言いたくて今日の発言者をお受けしました。

私が結婚したのはもう四半世紀前になるんですけれども、松江に来てみて初めて近くに原子力発電所があることを知りました。私の家は今島根原発から8キロです。リスクコミュニケーションについての話ばかりされるというご発言もありましたが、私が一番知りたいのはリスクに関する情報です。原子力防災に関する情報を一番知りたいと思っています。松江くらしといのちのネットワークというのは、食と環境を考える「松江たべものの会」という会の中からの会員もしくはOBがつくっている主婦が中心の団体で、自分の暮らしと子供を守ろうと思って、行政や事業者などに働きかけてきました。原発について、防災体制について知りたくて、県の消防防災課に行ったのはもう12年も前でした。それは1994年です。

なぜそういうことになったかという、この年に原子力立地給付金が出たからです。これを受け取ると原発を容認することになるのではないかと、私たちはとても困って、返してもよかったんですけれども、そのお金を年会費として原発について考える会をつくりました。私たちが一番最初にしたのがもし事故があったらどうなるんですかということが聞きたくて、消防防災課に行ったことです。たまたまですけれども、この年の原子力立地給付金が出る少し前のときに、私たちはチェルノブイリ写真展をアピオンに会場をお借りしてしたんですけれども、そのときにボランティアでみんなて受付を主婦ばかりだったので、二、三時間交代でみんなて受付したんですけれども、そのときにも放射能汚染事故があったら、こんな恐ろしいことになるんだというのを写真で見て、とてもショックを受けたからです。日本の原発は型が違うという意見もあるんですけれども、人間のすることには絶対はないので、事故はあり得るんじゃないか。

それと、地震のことについては、本当に10年以上前から、地震があったらどうなると、私たちはオグタ先生を呼んで講演をしていただいたんですけれども、絶対ここは地震が起きないなんて断言できるような科学知識はないというようなことをお聞きしまして、そうしたら一体

原発はどうなるんだろうかということが知りたくて行きました。一番びっくりしたのは、もし原発の事故が起きたとしても、私たちにその知らせがすぐに届かないということでした。ほかの例えば地震とか大水とか台風とかだと私たちは体感することができるんですけども、放射能汚染に関しては私たちの体は何も感じないです。チェルノブイリの人たちが大きな被害に遭ったのは、事故が起きたことを知らされないまま、普通の暮らしを続けておられたからなんです。

だから、事故が起きたとき一番最初に大事なのは、とにかく事故が起きたということを知ること、そしてすぐ避難することです。それなのに松江市は今合併したので、鹿島町や島根町には防災の無線や有線があるんですけども、松江市にはそういうものがないので、マスコミ、だからテレビやラジオの情報と広報車しかないんです。広報車については、数年前私は自治会長をしていたので、学園通りで、すみません、すごいローカルな話になって、水道管の破裂事故があったときに水が出なくなって、うちが給水車を呼んだんですけども、広報車が来て、給水車が来ましたと回っている広報自体をいつ来るかと思って聞いていたんですよ。でも、聞き取れなかったんです。だから、もし事故が起こったとしても、私たちはそれを知ることができない。

次に、今ちょうどヨウ素剤の話がされて、時間がもうちょっとあってお聞きしたかったなとすごく思ったんですけども、そのころもヨウ素剤の配布の体制ができていない。あのときは1つの病院に置いてあるとか、2つの病院に置いてあるとか、そういう状態で、そこから事故が起きたら運ぶんだっただけです。今、一応松江市は学校にはあります。

私たちが次にやったのは、だからヨウ素剤を家庭に常備しようというのをしました。島根県がどういうヨウ素剤が来ているかを聞きに行って、そのメーカーに聞いて、それが一つの瓶に500錠も入っていたので、これを分け合っても大丈夫かと聞いて、湿気に弱いから一回だけ直接触れないようにして分けるだけなら大丈夫というのを聞いて、みんなで買って分け合って家に置きました。

それで、次に聞いたのは、ヨウ素剤の副作用はどうなんですかと聞いたんです。そうしたら、県の担当課はそれについて何も知らなかったんです。ヨウ素剤の副作用ということについて、何回聞いてもわからないということで回答がありませんでした。東海村の事故のときにヨウ素剤を飲んだ方がいいのなんていう質問があったらしいんですけども、どういうふうにして飲んでいいかがわからない。例えば、事故があったときにヨウ素剤を飲むことになっていきますというふうに、原子力のしおりに書いてあるんですけども、私たちはどうやってそれを飲むこ

とになるのかもわからない。お医者さんに見てもらってから飲むのか、学校に置いているらしいけれども子供たちはどうやって飲むのか。もし副作用がある子がいたら一体どうするのか、そういう情報も全くありません。

その次に、実際事故があったら一体どうすればいいのか。原子力防災のしおりには、家の中で入って換気扇を閉めて、食べ物にラップしてと書いているんですけども、それは例えば家族が全員そろっていればそれはそれでいいと思います。でも、家族全員がそろっているときなんかほとんどないです。例えば、子供が学校に行っていたらどうすればいいのか。迎えに行っているのか、みんなが迎えに行ったら道路が渋滞していろいろなほかの大切な仕事をするものが動かなくなるんじゃないのか、それも聞きに行ったんですけども、はっきりした回答はいただけませんでした。

すなわち私たちは繰り返し、繰り返し、せめて学校に通っている間、子供たちは守ってください。できるだけことをしてくださいということをお願いに上がって、松江市では速やかに教室の中に退避するという訓練だけはされています。実際、訓練の状態を見に行っただけですけども、先生たちは非常に手順をしっかりと考えられて、運動場で遊んでいる子供たちを1人も逃さないようにしてぼつと昇降口から入れて、全部戸を閉めて、換気扇を閉じて、子供たちは集められます。だから、そこまでの事故だったら大丈夫なんですけれども、これが保護者に知らされていません。

学校が今何回も何回も訓練しているのに、どんな訓練をしているかということさえ私たちは知らないです。もちろん一般住民の避難訓練もあります。これも見学に行きました。ただし、一つの地区で広域避難の訓練をされるのはバス1台分、40人ぐらいです。自治会の役員の40人ぐらいの方が広域避難所とされる、私が行ったときはちょうど消防学校だったんですけども、そこまで避難して行かれて、それで放射能汚染しているかどうかというのを検査されて、そのときどうすればいいかという説明を受けます。そのとき聞いたのは、ヘアブラシと歯ブラシを使いますというのを聞いて、髪についたちはヘアブラシでとってください。つめに入ったのは歯ブラシでとってくださいというふうにお聞きしたんですけども、そんなこと原子力防災のしおりには何も書いてないです。だれが逃げるときにヘアブラシと歯ブラシを持って逃げるでしょう。

あと放射能被ばくの影響についても知らない人は多いです。チェルノブイリの事故からちょうど切れ目の年だということもあって、新聞等にもたくさん載りましたが、例えば幼い子供ほど影響が大きいということを知っている人はあまりいません。うちの娘は下が中3で来年16

歳になるので、とても安心しています。16歳未満だと健康に対する影響が大きいと聞いているからです。

あとアンケートの話があったので、それにつけ加えさせてください。

実際、私たちが何を知っているか、普通の人たちが何を知っているか、アンケート調査していただきたいと思います。今回、プルサーマルの問題があって、それから耐震性の問題があって、いろいろな人に私は聞かれました。私は答えることができなかつたんですけれども、どういふふうに耐震性ってこれで大丈夫という判断はどこでされているかについて、ほとんどの人が知りません。大丈夫と言われたから大丈夫だぐらいのことしか周知されてないんです。私たちに細かいことは知らされず、専門家が保障しているんだから大丈夫ですとしか聞かされていません。プルサーマルに関しても、核不拡散のプルトニウムに関して、これが原爆の材料だということも43トンも日本が所有していることについて初めて知った人がほとんどです。もっとわかりやすい形で情報を伝えてください。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

それでは、広瀬さん、お願いします。

○広瀬氏 私は松江商工会議所の青年部に所属しております。これは松江商工会議所というのは、松江の中で商売をして、今その事業を展開している企業が会員登録をしまして、その中で45歳までの地域の主に経営者なんですけれども、会員が所属しております青年部で約130名ぐらいおります。

今申しましたように、ほとんどが企業の経営に携わっているメンバーなんですけれども、今までお話がありました安全性とか、いろいろな専門的な立場ということではなくて、私は商売をしているということもありますので、そういう立場からお話をさせていただきたいと思いますが、1つはこれは本当に簡単に原子力の政策を進めていくことについてのメリットと申しますか、どういうところがいいかということなんですけれども、よく言われております化石燃料はある年数を限って枯渇してしまうということが言われております。石油は40年ちょっと、それから天然ガスも60年ちょっとということで、実は私はLPガスの販売店をしておりまして、実際には電気、こちらでは中国電力さんなんですけれども、ある意味では競合関係でもある部分があります。

でも、実際にはそういったことでエネルギーについては興味を持っておりますけれども、化石燃料には限りがあるということを常に私も頭に置いておりまして、私も何年か先には商売をかえなきゃいけないんじゃないかと思っているぐらいなんですけれども、原子力施策を進める

必要性、どうしてもこういうふうにして進めていかなければいけない。あるいは進めることによって、どういうふうなメリットがあるのか。例えば、単純な話、今石油の価格、原油の価格が変動することによって、私たちのLPガスなんていうのは本当に月がわりで価格が変わってくるわけです。そういった不安定な状況で私たちは電気を使うということに何か安心感を持ちたい。そういうところに原子力政策を進めていくことで、そういった不安がなくなるのだろうかということですね。

それから、商売をやっていると、例えば店舗で電気のエアコンを使うとなれば、一日回していますと非常にコストも高くなってきますので、そういったところを具体的にもっと本当に安くなっていくのか、あるいはそういった価格も安定していくのかという、これは商売、あるいは普通の市民として知りたいといいますか、考えているところであります。

それから、もう一つは企業人といいますか、商売をしている立場ということで、実際に原子力発電所、今回ちょうど先月3号機の着工があったということで、地元の企業としては、こういう原子力発電所の建設には非常に大きな期待をしております。直接的な経済効果、建設に伴ういろいろな需要がありますので、建設業を初めそれ以外にも例えば多くの方々が外からいらっしゃるので、ここで実際に何カ月か生活をされるということであれば、旅館の方々、あるいは飲食の方々もそういったことに期待をするというふうなことも実際にあります。さらには、3号機増設ということに伴って雇用の拡大だとか、そういった地元の経済効果、それから2次的、3次的な経済波及効果といったものがどれだけ期待できるのか、実際に期待しておりますけれども、どれだけのものがあるのかというようなことを私たちは実際商売している立場としては知りたい、期待をするというところであります。

もちろん先ほどいろいろなお話があったような安全性の確保ということは前提としての話なんですけれども、そういったところを何か具体的に、あるいはそういうような情報があれば地元の方の企業としては知りたいなというふうなところを期待をしております。

以上です。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

ここに3人の方にお伺いしましたけれども、少しコアメンバーと意見交換をしたいと思いますが、浅田委員、どうぞ。

○浅田委員 高山さんにお伺いしたいと思います。

日ごろの暮らしの中でのいろいろな活動を真剣にされていらっしゃる様子を敬意を持って伺いました。

その中で、アンケートをとってくださいというご発言がありました。私もウイメンズ・エナジー・ネットワークというところにいまして、一般の方々の意識というか、お気持ちを伺うときにアンケートは非常に有効な手法だなというふうに思っているんですが、勝手にそういうふうに解釈しちゃっていいものかと思ひまして、もうちょっとそこを詳しく伺いたいんですが、そのアンケート調査はどんな対象にどんなことを伺って、その結果どんなことを読み取れるかというふうに思っているのか、そこをもうちょっと詳しく教えてくださいたいと思います。

○高山氏 私がお伝えしたかったのは、アンケートをとってくださいということではなくて、私たちがどんなに知らないかということを知っていただきたいと思ったんです。私自身は10年前から原子力防災に関心があったことがあって、全体から始めるより私はちっちゃいところから始めちゃったんですけれども、そこから次々、次々広がって行って、真ん中がぎゅっとしていたせいかもしれないですけれども、結構全体が今自分なりに見えたかなという気はしているんですけれども、そうしてみると今回プルサーマルのことが始めだったんですよ。みんなが知らなかったんですよ。原発の使用済みの燃料、何か最終的な処分場がないみたいだよみたいな声しか知らなくて、そこからプルトニウムを取り出してもう一回使うと言っているんだよということをみんな知らなかったんですよ。プルトニウムって何と。長崎原爆がねみたいな話をしないと、それもみんな知らなかったんですよ。

だから、MOXの話にいく前に話すことがすごくたくさんあって、だからどういうふうに発電されるかから始まって、これが飛び出してあぁいって、こうなってね、あぁなって、こうなってねから始まって、ここでプルトニウムができるんだよという話をして、これを取り出して、それから劣化ウランがねとって、劣化ウランって何という話をして、だからウランというのはその辺に落ちているんじゃないかと掘ってとってねみたいな、濃縮すると要らなくなるところができて、これとこれをこうやるとMOXになるんだよ。「へえ」みたいな話から全部話さなきゃいけないので、すごく大変だったんですけれども、だからみんな知らないんですよ。

○浅田委員 いかにも知らないかということを知るためのアンケート調査ですね。わかりました。ありがとうございます。それで、一般の方々を対象にということですよ。ありがとうございます。

○高山氏 一般の方々です。

アンケートされて、その結果を発表することによって、平和フォーラムさんのアンケート結



果がこうだったというのを新聞に載ったときにそれを見て、そのまた反応の声を聞いたんですよ。みんなこうなんだというふうに、アンケート結果を公表することによって新たに関心を持つ人がふえると思います。

○浅田委員 おっしゃることは大変よくわかりました。ありがとうございます。

○中村コーディネーター 吉岡さん、どうぞ。

○吉岡委員 高田さんにお伺いしたいんですが、「シェルプールの雨傘」というのは懐かしい映画ですけども、東嶋さんはご存じなのかなと、私らより上の人は……。

本論に入りますけれども、リスクコミュニケーションという、そういうタイトルの活動を広めようという運動があります。しかしそれは総合的に議論すべき問題について生命健康リスク、つまり安全のリスクだけを議論して、しかも多くの仮定を置いた確率計算を行い、被害の確率は小さいから大丈夫だという、そういう言い方をします。そういう結論を出す非常にワンパターンなものであって、私としてはそういうものは余りコミュニケーションとして意味がないと思っております。その点は高田さんと同じ意見であります。だから、具体的な生命健康リスクについて話すのは、別の話し方でやった方がいいと思っています。事故の場合、高山さんが具体的に言ってくれましたので、ヨウ素剤を食前か食後かとか、あるいはどのように飲んだらいいかとか、そういうことをフランスでどのように教えているのか、あるいは高田さんは日本でどうやろうとしているのかということをお聞きしたいんですが。

○高田氏 知識というのは、断片では力にならない。体系になって初めて力になるわけです。知識は必ずしも力にはならない。体系化されて知力になると思います。

ヨウ素剤ということも、やはりこれは医療行為なわけで、医師が関与しないといけない。だからヨウ素剤は、機械的に備蓄して配布して飲んで終わりというあまり短絡してはいけない。ヨウ素剤効果というのを医学的理解のもとに医師がその知識を持って取り組むべきと思います。原子力発電所を持った県については特にそれが求められると思うんですね。

一方では、そういう体系化した知識を日本の医師何人が持っているのかと、これはまたお寒い状況に私はあると思います。放射線の知識を持っている医師が何人いるかと。これは私は医学部で教えている都合、よく知っているんですが、国家試験を通ると医師になれる免状を持つ。でも、放射線防護の医師国家試験問題はないんです。放射線を使わない病院はありません。島根県で一番放射線を利用しているのは中国電力と病院です。中国電力の場合は放射線とは一体何かをよく認識して、技術体系化した人たちが利用しています。一方、病院では放射線の防護を含めて体系化して、放射線を利用しているのかというと、これは中国電力の皆さんに比べる

とお寒い状況にあるわけです。放射線科の先生方はかなりの知識を持っています。でも内科等の先生は、胸部レントゲンを受けてください、CTを受けに行ってください、MRIを受けてくださいと、だけれども、防護として知識はほとんどありません。

そういう意味で、放射線防護の知識を体系化するためには教育が必要です。特に高等教育をしないといけないわけです。日本の場合、原子力工学科というのは過去存在したんですが、今なくなってしまっています。今の中国電力の技術者の人たちは優秀だと思うんですが、そういう大学の専門課程がなくなるとは、危険な状態を迎えてしまいます。ですから高等教育を持続させていかななくてはならないと思います。

一方、病院の方も今欠落している部分をきちっとしていかなきゃいけないと思っています。でも、札幌医大では私が教育していますが、ほかの多くの医学部ではきちっとされていないのが現状です。これは国を挙げて、原子力の平和利用を推進するという原子力委員会ですと、是非そういった、高等教育をきちっと進めて、維持して行ってほしいと思います。私の願いです。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

○木元座長 原子力政策大綱の論議の中でもそのご議論は出ましたし、委員会の中でも人材育成という観点から、かなり強硬にこれをやっつけていかなければいけないという意思をもっておりますので、このお言葉はしっかり受けとめました。

○中村コーディネーター ここでちょっとほかのパネリストの皆様同士の意見交換も進めたいと思いますので、曾我部さん、どうぞ。

○曾我部氏 実は私は41年前に被ばくをしております、皆さんよりもヘモグロビンの数はかなり低いです。でも、今100メートルを15秒で走れるんですけれども。

被ばくしてヨウ素剤をどうのこうのとういよりも、僕はヨウ素があるのは海草類なので、人よりも多く海草類をとることによって健康を維持していますけれども、ヨウ素剤云々というのは先ほど言われたように、医者にやってもらわなきゃいけない。それでは間にもひよろしもないんですね。だから、自分の体は自分で守るということを基本にしていけば、そういう海草類の中にヨウ素がいっぱいあるので、あまりたくさんとり過ぎて、甲状腺に被ばくをするというようなこともあるかもしれませんけれども、それはそこまでいくには1日に100グラム以上食わないとだめだろうと思うんですね。だから、かなりそういう面で自己防衛しています。

だから、これが危険であるということを自分が認識したり何かして、情報というのをそこから自分で求めていかないといけない。政府が知ってもらわなきゃいけないという情報を流したとしても、自分で必要なかったら受け取らないんですね。いかにいい知識があったとし

ても、そこにバリアをつくられてしまったらもうだめなわけで、それを自分自身が開いていて、初めて獲得してさっきの知力になるわけですけれども、それを多くの人たちにそういう体験とか、いろいろなことを通して語り合う場が市民の中にあるといいと思うんですけれども、だからこういう場を設けてもらって、改まって何か話をするんじゃなくて、そういう市民同士の中での活動というのが今まで僕らも少なかったと思うんですよね。だから、そういうのもどんどん、どんどん広げていく。この機会にそういう面ではいい機会をつくってもらったと思っています。

○中村コーディネーター おっしゃるところは、高山さんや杉谷さんがやっていたらっしゃるそういう市民の活動の中で、そんな輪がどんどん広がっていくといいなと思うし、今の曾我部さんのご発言の中には、安達さんのおっしゃったことと共通する部分も恐らくあるので、知りたくないと思っている人にとってはいつまでたっても知りたくない情報のままでい続けるというのをどうするかというのは、もう一つの問題としてずっと残るなという印象を持ちましたが、ほかのコアメンバーの方、東嶋さん、どうぞ。

○東嶋委員 皆さんのお話は非常に示唆に富んでいて、たくさん勉強させていただいたんですが、私自身は特に青山さんのお話と高山さんのお話に非常にいろいろな内容が含まれているなと思ったんです。

何点かあるんですけれども、1つは高山さんがご家族の暮らしを守ろうということで、原子力防災はどうなっているのか、興味を持たれて、県の消防防災課に行かれたり、あるいは別の機会にまたヨウ素剤のことを尋ねられたりしましたが、その尋ねたときにお答えを得られなかったわけですよね。

○高山氏 ヨウ素剤の副作用に関しては、結局国に問い合わせしますということで、ずっと回答が来ないうちに担当の人がいなくなったんだと思います。

○東嶋委員 結局はお答えが得られなかった。知らないということですね。

○高山氏 今、ヨウ素剤、ヨウ素というのは、私もいつも一生懸命海草を食べているんですけれども、海草を食べて当たった人は余り聞かないですよね。だから、きっと副作用はないんじゃないとかと思っていたんですけれども、今お聞きしたらありそうなので、どうしようかなというふうに思っています。

○東嶋委員 せっかく興味を持ってといいますか、原子力防災のことに知りたいと思ってアクセスをしていただいたのに、そのお答えをできなかったということは、これは原子力だからわからなくて当然じゃなくて、例えば青山さんのお話の中に昔の人は火も手に余ったんだろう

けれども、今は核分裂が手に余るやり方じゃないかというお話もありました。でも、今火も手  
なずけているわけじゃなくて手に余っていますよね。広瀬さんがLPガスの販売をされている  
ので、言いにくいですが、ガスのことだってガス自体でも事故も起こっていますし、火  
事も起こっている。でも、これは防災体制をきちんとしていて、地震に対してもそうですよね。  
防災体制があって、それで市民が知りたいと思ったら、例えば火事のと看どうしたらいいのか  
というのは、消防防災課ですか、問い合わせたらわかると思うんですよね。それが原子力につ  
いては、問い合わせてもお答えを得られなかった。それは問題ではないかと私は思うんです。

高山さんがせっかく周囲の皆さんと防災のことから興味を持って、どんどんプルサーマルの  
ことだとか核分裂のことだとかお勉強なされて、そういうふうに防災からスタートしている  
ろな知識を深めていくという、このおもしろいというか、非常にいいことだと思うんですが、  
そのきっかけとなった入り口のところできちんと答えられなかったということ。そして、もう  
一つは非常に具体的にブラシのこととかおっしゃいましたけれども、市民が知りたいのは本当  
にもっと具体的で細かいことですよ。それは高山さんのような方が防災体制をつくるときに、  
一緒に入ってやったらどうなんじゃないかと私は思うんですけれども、これは私の意見です。

○高山氏 それは要望として出したことがあるんです。防災体制というのを市民も参加して、  
専門家も市民も参加する格好で、だから全国でこうではなくて、松江市だったらこうとか、  
私が住んでいる地域だったらこうしたらいいというのをやるべきではないかというふうに提案  
したんですけれども、今自治会に原子力だけでない、すべての災害に対する防災体制をつくら  
うというふうに今呼びかけていますというふうにおっしゃいました。

あと周知に関しては、防災無線をつけようとしたら、無線のスピーカーが立つところの人が  
嫌だと言ったからできませんとか、そういうご回答をいただいたのを覚えています。

あと国の原子力防災体制が放射能漏れを伴うような大きな事故が起きるといふ事態に準備し  
るというふうなことは言ってないんです。だから、今やっている訓練というのは、ひよつとし  
たら子供が中に入っている、あれは単にそういうものをちょっと踏み込んでやっているといふ  
だけで、いかに事故が起きたかというのが伝わるか、それに関してみんなが何かのことをして  
起きたらどうにかなるように避難したところで事故がおさまるといふ訓練しかしてないんです。  
だから、先のことは考えてないですよ。大きな事故があつて、できるわけがないじゃないで  
すか。これだけ人数のいる県庁所在地に仮にチェルノブイリのような大きな事故が起きたとき  
に、みんなが一体どうやって逃げるんですか。みんな例えば家の中とか公民館とかコンクリー  
ト家屋の中に退避しているかもしれない。そこからどうやって運ぶんですか。バスが来てくれ

るといふふうに私は聞きました。消防防災課から、原子力だけじゃなくいろいろな事故に備えて、周辺の市町村からバスが運びに来てくれるとあって、でも私がバスの運転手だったら絶対行きません。

それで、地震の事故のときもボランティアが地域からいろいろなところから駆けつけてくれましたけれども、原子力の事故の場合は絶対ボランティアが来ないというふうに言われています。だからといって、私は事故が起きないことにしておきたいんです。もし事故が起きたらできるだけことはしたいんです。

東海村の事故のときに、あの日雨が降ったじゃないですか。子供たちは学校にいたんですよ。よく知っている先生は家に帰さなかったです。雨が降っているときに、放射能漏れの可能性があったら、雨が降っていたら雨と一緒に落ちてきます。だから、雨の中を家に帰したら被ばくするかもしれない。それを知っている先生は子供たちを帰さなかったんです。情報が出るんですよ。だから、できるだけことはやっていただきたいです。でも、松江市と島根県の教育委員会はすごく頑張ってくださいましたよ。だから、教室の中に退避するまでは完璧です。

○中村コーディネーター 東嶋さんの質問の趣旨は。

○東嶋委員 質問じゃなくて、ですから防災体制をつくるときにこういう具体的なことを知りたいとおっしゃっている市民の方々も一緒に入るべきだと思いますという私の意見を申したまです。

それで、高田先生のお話なんですけれども、私も2002年と2003年にフランスに行きましたときに、フランスの原子力庁がドクター向けの放射線の知識を啓発するフェアをやっていらっしゃったんですよ。高田先生がおっしゃったように、ドクターは放射線の利用の点でもかなり利用されているし、しかも放射線防護ということでもキーパーソンになりますので、原子力の情報を届けるというときにドクター向けにきちんとした情報を届ける。これも大切なことだなと高田先生のお話を伺って思いました。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

それから、ほかの方とアプローチが違ったのが実業についていらっしゃる商工会の広瀬さんだったと思うんですよ。立地で特に松江は町村合併で日本で唯一の県庁所在地立地都市になったと。そこで、おっしゃったとおりメリットとか必要性とか、そっちの方というのがもっとも知りたいとおっしゃったのも常識でしょうと思われる部分もあると思ったんですけれども、それはそれでちゃんと知らない、というふうにおっしゃられたのは、また非常に印象的で、はっきり申し上げてこういう席ではそれはもう終わったことでしょうかみたいな感じで、

なかなかそこまではっきりおっしゃる方はいらっしゃらないんですよ。だから、そういう意味では逆に非常に印象的に私は伺いました。

ほかコアメンバー、ございませんか。

それでは、新井さん、お願いします。

○新井委員 これはどなたに答えてもらうということでもないんですけれども、私はたまたま先月ナイロビでありましたCOP11に行ってきたものですから、原子力とのかかわりということと言いますと、これまでは環境に原子力、CO<sub>2</sub>に限って言いますとかなり効果があるわけですけれども、議論するのが嫌だという雰囲気は少し脱してきて、結構議論の中に原子力、議論だけなんですけれども、それをやろうという話とちょっと違うんですが、随分出てきたものですから、もうそろそろ本当にこのことを深刻に考えておかないと、CO<sub>2</sub>の問題もいよいよ差し迫ってきているのかなと思うんですが、皆さんの中でこの点はどういうふうにお考えになるのか。例えば、事故のことがたくさん出ましたけれども、高山さんでも結構です。そのあたりのバランスというのはどういうふうを考えればいいのかなど。

○高山氏 私としては、子供たちによりよい環境を残していくためには、今のたくさんつくって、たくさん捨てる暮らしを変えていかないといけないと思います。私たちは電気がとまったら困るねと、例えばクーラーがきかないと暑いじゃないとか、車がなかったら移動するのに不便じゃない。これは私たちが今の快適さを求めているんです。便利で快適な暮らしだから、私たちの便利な快適な暮らしのために子供たちに残る環境を汚染しているんです。だから、石油の資源の埋蔵量について私は異論があるんですけれども、勉強し始めた多分30年くらい前からずっと石油の埋蔵量は30年のままです。もうないはずで、多分40年に増えています。

○中村コーディネーター それは違うんですよ。50年前から40年しかもたないって言われているんです。

○高山氏 私としては、エネルギーがないから、日本は資源がないから、だから原子力が必要だとは考えたくないんです。もし資源が少ないんだったら、資源を使わないような暮らしに変えたいんです。

○中村コーディネーター それは理念としては非常にわかりますよ。

○高山氏 理念だけじゃなくて、例えば私は夏にクーラーを使いません。それは私が家を建てる時に木の家にして、屋根は瓦にして、風通しがよくして、前に木を植えてすだれをしているからです。そうしたら涼しいんです。みんながそうすればいいんです。

○中村コーディネーター いいですよ。ご意見として伺いますけれども、多分安達さんはまた

違う意見をお持ちのような感じがします。

安達さん、どうぞ。

○安達氏 今、新井さんの方からCOP11に出られたということで、地球温暖化のCO<sub>2</sub>問題、これは我々の一般のレベルの理解度で言うとなかなかないんですけども、日本は少なくともCOP3によって、京都議定書の議長国だったんですよね。それを批准させ、議長国として取りまとめて、各先進国に守っていただくようにという取りまとめをして、それが今ずっと議定書が守られるかという年度期限、今会を重ねるごとに怪しくなっているというご説明だったと思うんですけども、日本にとっても国際社会でリーダーシップをとるとか、とらないとかという以前に、自分のところの国で規定した環境問題、CO<sub>2</sub>を出さない。特に先進国には守っていただくということを自分が議長国としてまとめた以上は、自らの責任で特に日本、他の先進国は仕方ないです。音頭をとった自分の国だけでもせめて守っていこうと、そのためには具体策はどうなろうという手段を立てていくのが当然ことだと思います。

それには新エネルギー、いろいろございますけれども、先ほど意見発表者の方からも意見もありましたが、現実的にも何年後かにはその数値というのは決まっているわけですね。これをやるためにはどうするか、それが守れないようでは当然のこと、それに努力しないようでは、当然取りまとめに奔走した国自体の信用にもかかわります。現実的には、原子力等のCO<sub>2</sub>を出さないエネルギー、これは代替といってもほかのものではどうしてもCO<sub>2</sub>が出てしまうので、これが安全面からのチェックをしながら、これは推進していくというのが私個人の意見ですが、日本としての役割ではないかと思っております。

以上です。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

また、2部でも会場の皆様からもご意見を伺いますけれども、パネリストの皆さんからのご意見もまたお伺いするようにいたします。

それで、おくれておりました近藤委員長も公務を終えて駆けつけてくれたんですけども、近藤委員長には最後にちょっとお話を伺うとして、1部を終わるに当たって、齋藤委員長代理に一言皆さんのご発言、それから意見交換をお聞きになってお伺いしたいと思います。

○齋藤原子力委員長代理 急なご指名で、ちょっと何をお話ししていいか、迷っているところでございますが、今日市民代表の、7名の方から非常に率直なご意見を直に聞かせていただきまして、大変参考になりました。皆さんのご意見に対しては、コアメンバーの方々からそれぞれ感想なりご意見がありましたけれども、私も全く同感でございます。安達さんがおっしゃ

ったように、サイレントマジョリティというような形の代表的な意見の方もいらっしゃいましたし、放射線防護がご専門の方とか、いろいろな立場の方のご意見を伺うことができたということで、今後の原子力政策を考えていく上で、原子力発電所の所在する地域の方々がこういう思いを持っているということをお聞かせ頂けたことが私どもとしては、まず本日の第一の成果ではないかと思っております。

細かい点については、いろいろ私なりの意見もございますけれども、第1部として意味のあるお話を聞かせていただいたというのが私の感想であります。

どうもありがとうございました。

○中村コーディネーター ありがとうございました。

さらに第2部の方では、会場から挙手をしていただいて、また直に市民の皆さんのご意見をお伺いしたい。パネリストの皆さんにもさらにお話を伺いたいと思っております。

それでは、ちょっとここで休憩をとらせていただいて、第2部へ移りたいと思います。

第1部、パネリストの皆さん、ご発言ありがとうございました。（拍手）

○事務局 事務局からご連絡を申し上げます。

ここで10分ほど休憩をとらせていただきます。当懇談会の再開は19時25分とさせていただきます。よろしく申し上げます。

○事務局 それでは、時間になりましたので、再開させていただきます。

まず初めに、第1部において地元の方々からのご意見発表をいただきましたけれども、ご意見について本日会場にお越しの皆様方からご意見を伺います。ご発言をご希望の方は挙手をいただければ司会の方がご指名いたしますので、指名されました方はご足労ではございますが、お近くのマイクのところまで来ていただいて、ご発言を頂戴したいと思います。その際には、お名前とどちらからお見えになったか、またできましたらご職業を頂戴したいと思います。

なお、できるだけ多くの方々からご意見をお伺いするために、ご発言は3分ぐらいを目途に簡潔にお願いしたいと思います。ご発言が3分を経過したところで、事務方の方でベルの合図をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

それでは、引き続き中村浩美さんに司会・進行をお願いいたします。

○中村コーディネーター 遅れていたコアメンバーもそろったようでございますので、第2部を始めさせていただきます。慌ただしい休憩ですみません。

それでは、第2部を会場の皆様から直接ということでございますが、後ほどみんなでわいわ



いとやりたいと思いますが、今ご案内ありましたように、7人の方に第1部でそれぞれのお考えを述べていただきました。それをお聞きになったの感想でも結構ですし、ご意見でも、あるいはパネリストへのご質問でも結構です。会場からどうぞ、挙手をしていただければ私が指名申し上げます。

○タケタニ氏 安来市から参りましたタケタニと申します。

第1部で発表なさった方で非常に感銘を受けましたのは、平和フォーラムの杉谷さん、それから松江のくらしといのちのネットワーク代表をやっておられました高山さんのお二方の発表に非常に感銘を受けましたし、特に高山さんが具体的な運動をなさっていることに対して対応のできなかつた松江市、むしろ私はこれに怒りを感じました。本当に何か事故がないからのほほんとした対応になっているんじゃないかというふうに思わざるを得ませんでした。簡単に避難一つ取り上げてみましても、一番難しいのは皆さんご承知のように放射能というのはにおいてもありませんし、色もついてないわけですから、簡単にどちらへ逃げなさいなんていっても、そう簡単にはいきませんし、それからもう一つは特に鹿島原発の危険範囲を10キロでむしろ逆に逆転制限をして、そしてそれ以外は広がらないと言わんばかりの政策もとっておられるわけですね。

ですけれども、私はいつもよく思うんですが、何かあってはいけないことですから、こういう発言は不穏当だと自分で承知をしながら、何かあったときには例えばたまたまそのときの風が北東から吹いてきて、そして風のスピードが1時間に10キロ、あるいは15キロの風が吹いておったときには、逃げるなんてことには全くならないはずなんです。それなりに、なぜ10キロで当たり前のように地域制限をされたかというのは、それも私はいまだに理解がつきません。

それと、せっかくこういう市民参加懇談会というのをお考えいただいたものですから、できましたらこれも定期的開催をしていただけたら非常に喜ぶます。よろしく願いいたします。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

木元座長は定期的に関きたいという意思はお持ちでしょうが、諸般の事情がありましてという感じですが、国のことですから、予算上の制約ということになるんですが、我々も気持ちとしては同じです。いろいろなところで定期的に関けたらいいなと考えております。

○木元座長 そして、ちょっと一言言わせていただくと、我々が企画するんじゃなくて、そういうご要望のある声を届けていただければそれが反映されますので、先ほども申し上げましたけれども、私ども手づくりでやっておりますので、タウンミーティングのように予算はかかり

ませんので、伺わせていただきます。よろしくお願いいたします。

○中村コーディネーター 続いてどうぞ、自由にご発言いただければと思います。

○サカモト氏 松江市の西川津町というところで住んでいますサカモトといいます。

市民の一番関心の高い地震と活断層の問題について、質問といいますか、こういう状態だということをよく知っていただいて、できれば中村さんが前回松江市のフォーラムでも司会をされましたけれども、原発所在地で地震の活断層の問題は大変興味が高いものですから、ご参考にとしますので、できれば原子力委員会でもどなたか役員の方が答えていただければと思います。

2点ありまして、1つはここの原発の活断層の問題について、僕は71年に島根大学に入学するまで、ここに原発があることをまだその当時建設中でしたけれども、知りませんでした。それから三十数年住んでおりますけれども、活断層の問題について興味を持ちましたのが1980年です。ちょうど「日本の活断層」という本が出まして、このあたりに活断層があるということに勉強もさせていただいたり、私が習った島大の地学の先生方にもいろいろ聞きまして、これは大変なことになるんじゃないかと思っていました。

ところが、中国電力は何億というお金をかけて調査されても、最終的に県の調査委員会でも8キロだと。国から追加調査を命じられて、ようやく10キロまで認められました。その当時から、島大の先生や広島大学の先生方はそんな短くないと、20キロぐらいあるんじゃないかと言われていました。それが一番近いところでことしの6月、大体20キロというのは日本の中心的な学者の皆さんでははっきりしました。20キロになりますと、1、2号機の耐震性の問題というのはクリアできないような状況に今なっているという、そういう状況で市民の皆さんが大変心配しております。

知りたい情報は本当に届いているかという今日のテーマですけれども、僕も大変心配がありまして、日本の活断層のもとになっている宇佐美龍夫さんという宇佐美カタログ、日本の地震の第一人者です。あの方にある人を通じて手紙を出しまして、お返事を夏にいただきました。その中身は大変重要でございまして、こういうところではどうか、ちょっとありますけれども、説明させていただきますと、今度の活断層と密接にかかわりますけれども、880年に島根県で一番大きな地震だと言われたマグニチュード7から7.2と言われている出雲の地震というのがあります。これが耐震の審査にも大きな影響を及ぼしておりますけれども、これの震央、その場所がわからなくて、わからないときは昔の風土記当を見て、国庁に置くというふうになっております。

国庁というのはどこにありますかといいますと、原発から11キロ離れた松江市の大草町、これは国が指定している出雲の国庁です。ところが、宇佐美先生含めて、「日本の活断層」が引用しているのは、全部そこじゃなくて原発から23.8キロ離れた安来市に震央を置いて検査をされているわけです。宇佐美先生は私の手紙に、サカモトさんのご指摘のとおりそれは間違っていたと、次に自分が本を出すときは震央は大草町の出雲の国庁に置くというふうに言われていますね。私みたいな素人が見てもおかしいと思って、第一人者に質問したらそういう答えが返っております。原子力安全委員会とか、経済産業省とか、資源エネルギー庁の専門の方が出雲の国庁がどこにあるかということぐらいわからないはずなかったんじゃないかと思って、僕はもっともっと情報公開を徹底していただきたいと。

以上です。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

地震の問題、耐震性の問題については、原子力委員会は直接お答えする立場ではないのかもしれないけれども。

○木元座長 昭和31年に原子力基本法ができて、原子力委員会が置かれることになり、その後安全性の問題がいろいろ出てきましたので、原子力委員会から分かれて規制を含めての安全性については原子力安全委員会が担当しております。ですから、地震のことも安全委員会の管轄になっておりますので、原子力委員会としてはお答えはできないことですが、今のようないろいろな情報がありますよね。サカモトさんがおっしゃってくださったような別な情報もありますね。ですから、そういう情報を私たちは共有しながら、いろいろと話し合いを続けていくことが重要かもしれませんし、また国なり事業者なりが関与していくことも、意見を交換することも必要じゃないかなと考えております。

ありがとうございます。

○中村コーディネーター ちょうど耐震指針も見直されて、リスクに対する考え方というもの以前とは変わってきている中で、ご指摘のように私も先日こちらへ伺って、皆さんがプルサーマルのことはもちろんだけれども、耐震のことについて非常に関心が高いということはよく存じ上げておりますし、先日も実は鈴木委員長にお会いしたので、原子力安全委員会の方にもその旨は伝えてあります。

ありがとうございます。

続いてどうぞ。

○アシハラ氏 松江市に住んでおりますアシハラといいます。

先ほどからのパネラーの方たちのご発言を聞いていて、ちょっと感じたことがあるんですけども、自分に都合の悪い情報、聞きたくない情報はどうしても耳の中に入ってくないというご発言があったと思います。しかし、最近この中国電力、原子力に関連してではないんですけども、揚水発電用のダムがあるんですけども、その測定値をずっと改ざんしたまま、それを国に間違った報告のまま届け出たということがついこの間発覚いたしました。大変大きな問題になっていたわけなんですけれども、ダムの問題だけに限ったことではない。これはよその電力会社でも原子力に関するデータ捏造とか、たくさんありましたので、事業者の方が自分たちにとって出たくない情報、都合の悪い情報というのを出してこないという大きな問題があるんじゃないかなというふうに思わざるを得ません。

今回の問題もいわゆる内部告発で表ざたになったわけなんですけれども、内部告発に頼らなければ私たちはそういった情報を手にすることができない、知ることもできないわけなんです。大きな会社の中で一従業員として仕事をしている中で、自分の会社の行った不正に関して内部告発をするということは大変な勇気が要ることだと思うんですね。それは滅多にあることでもありませんし、そこは国の方から徹底して事業者の方に対して自分たちにとって大変マイナスになるような情報でも包み隠さずすべてを地域住民に開示するよにということはずひとも徹底していただきたいなというふうに思っております。

以上です。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

原子力委員の方から何かコメントございますか。

○木元座長 今おっしゃったことなんですけれども、東電の不祥事がありましたあの場合は、アメリカから告発的なことの報告があったんですね。まず経産省に手紙が来て、それから東京電力に届けられたという経緯がありまして、それを機に今度は告知された方、内部告発という言い方じゃありませんけれども、自分の知り得た情報を通告された方を保護する法律もできました。そういうことで、内部的な事情を知っている方が公的な利益のためにそういうものを報告なされた場合には、その人はちゃんと保護しなければならないということになっておりますので、ある程度のカバーはできているということでご認識いただければと思います。

○中村コーディネーター さらにご意見いただきますが。

どうぞ、いらっしゃいませんか。

それでは、後ほど思いついたらまた手を挙げていただくこととして、それでは1部の続きという形になりますけれども、パネリストの皆さんとコアメンバーとでまた意見交換をしてまい

りたいと思いますが、私自身も先ほど高山さんのお話を伺って、さらにヨウ素剤のことを伺いたいということで、医学、お医者さんたち、病院との協力というのは非常に今日伺った中でも印象的なことだったんですけれども、放射線防護関係の専門家として高田先生にもう少しコメントいただければと思います。

○高田氏 今日はいろいろな人からヨウ素剤のこと、10キロメートルのこと、チェルノブイリ事故のことが出てきたので、それらを少し説明させていただきたいと思います。チェルノブイリ事故から20年たってIAEA、WHOから報告がありました。衝撃の報道もありました。そこも含めて、長年調査してきてわかったことがありますので、少し皆さんに説明させていただきたいと思います。

まず、ソ連が崩壊して初めて外国の私たちが調査に行けるようになりました。これでいろいろなことが明らかになってきたわけです。当然ロシア、ベラルーシ、ウクライナの科学者たちは、非常な能力を持った人たちです。ある意味日本の放射線防護の専門家よりももっと深いところまで知識を持った人たちでした。これが一つの驚きだったんですけれども、その人たちの調査した結果は私もかなり信用しています。当時子供だった4,000人が甲状腺がんになったとWHOは報告しています。これは事実です。ところが、将来がんになって死ぬ方、この人数が新聞報道されまして、非常に混乱が起こった。WHOの報告では、非常に汚染の低いところの人たち、680万人ですけれども、その人たちの中でWHOの計算では5,000人ががんで死ぬことになっています。これはあくまでも推定であって、本当にそうなったということを報告したわけじゃないということをまず私たちは理解しない。この推定というのは非常に難しい問題を含んでいます。

これに対して、私の見解ということで、ことしの「原子力eye」7月号にチェルノブイリ20周年ということをもとめた文書を報告しました。向こうの保健所等が調べているわけですが、甲状腺がんになった人は4,000人、しかし、2002年までに亡くなったのは15人という事実です。ですから、推定と実際亡くなっているかなりのずれがここで生じているわけです。なぜかといいますと、この甲状腺がんというのは、死亡する確率が低いんですね。多くの場合、外科手術で甲状腺がんというのは回復するわけです。ベラルーシの事例でも99%が手術で成功しています。

ソ連型の原子炉は日本と違った黒鉛の原子炉です。これは今北朝鮮がプルトニウムを抽出して核兵器をつくるのに使っている原子炉です。日本のは黒鉛炉じゃなくて軽水炉です。黒鉛というのは、皆さんご存じのように炭ですから燃えやすいんですね。日本の場合は黒鉛という燃

えるものを原子炉の中心部に置いていない。周りに置かれているのは水です。チェルノブイリのような火災が起これないということです。日本の原子炉では、ああいった爆破して火災が起これるようなことがないというのが大きな違いです。

もう一つ原子炉の周りが格納容器とって、およそ1メートルぐらいの分厚いコンクリートで囲まれています。ソ連型にはそういった防護壁がないということで、一気に爆発して建屋が吹き飛んでしまったのでした。構造的に日本型、あるいはヨーロッパ型と旧ソ連型で大きな違いがあって、ああいった爆発的なものが起こりにくいのです。それを証明したのがスリーマイル島事故だったわけです。スリーマイル島事故も同じように炉心が溶けるような大事故だったんですが、建屋が吹き飛んだわけでもなく、放射性物質が環境に大きく漏れたわけでもない。甲状腺がんになった子供は1人もいない。公衆が受けた放射線の量は1年間の自然放射線以下でした。

そういう根本的な違いから、日本の危険対策の範囲が10キロメートルと考えられている一つの根拠になっているわけです。ただしこの辺は私の専門ではありません。ということで、ソ連型のような事故は起これない、起こりにくいと、こういう理解を原子力の専門家たちはしているようです。

ここからが私の専門になるんですが、チェルノブイリでなぜ4,000人の子供たちが甲状腺がんになったかということ、吹き飛んだ建物から屋外に環境に放射性ヨウ素が大量に出ました。この放射線ヨウ素が周囲の牧草を汚染しました。汚染した牧草を牛が食べました。放射性ヨウ素で汚染された牛乳が絞られて出荷されました。だから、汚染しなかった町にも汚染した牛乳が出荷されて、子供たちが飲んだのです。それによって、甲状腺が高い線量を受け、甲状腺がんの原因になりました。

放射性ヨウ素というのは、体内に入ると甲状腺に蓄積されるという特徴があります。なぜかということ、ホルモンをつくるためです。特に発達期にある子供たちの甲状腺には蓄積しやすく、特に子供の甲状腺線量が高くなってしまふ。この甲状腺の被曝の80%の原因はヨウ素で汚染した牛乳が原因であるということがロシアの専門科学者たちの長年の調査でわかってきたんです。この汚染牛乳の出荷、流通をストップさえすれば、4,000人みたいな多数の甲状腺がんを発生させないで済んでいたんですね。ところが、ソ連崩壊直前の食糧事情の非常に難しい状態で、汚染しても出荷させていたという社会的状況にあったと思うんです。

日本の場合、そんなことは当然起これないわけです。こういったときに一番アレルギー反応、拒絶反応するのは日本人です。汚染していると言われたり、本当には汚染してなくても拒絶す

中国電力さんが設置されるとき当時の中国電力の社長さんがこう語っておられるんですよ。人間がつくったものだからトラブルがないとは言えないと、全くそのとおりだと思うんですよ。それを防ぐために、技術者の方に大変な努力をしておられるとは思いますが、地元の方からするとそういった心配をしながら子供たちを育てていく、孫がここで生活すると。

今のチェルノブイリの原発事故の後でも、当時のゴルバチョフ書記長はあの事故によって核戦争の悲惨さを知ったと。原子力のエネルギーが制御できなくなったときの恐ろしさを初めて実感したというコメントを発しております。立地県の立場も十分に解した上で、学者の先生は発言していただきたいなというふうに思います。

なお、後半の今の事故に遭ったときの対策等につきましては、本当に先生に繰り返しおっしゃっていただいておりますように、行政当局にもっとこの原子力委員会から指導をしていただいて、本当にどんな先生が話していただいたようなことが県民、市民に周知徹底できるような方策をぜひともとっていただきたいなと。

話を聞きながら思い出したんですが、私は六十数年なものですから、生きてきておるものから、知っておる人は余り少ないんじゃないかと思うんですが、小学校のとき、全校で「空気のなくなる日」という映画があったんですよ。学校全体で見に行ったんですけども、今から考えるとハレー彗星が地球に接近してくる、そのドラマだったと思うんですが。

○中村コーディネーター 日本電波という会社がつくったんですね。

○杉谷氏 そのとき空気がなくなるぞと。村長さんとか、お金持ちのところは今の空気入れを買われましたよね。空気入れも買えない子供たちはたらい桶に水を入れて、そこの中で息をとめる大変な訓練をしたと、そういうシーンが頭に残っておるんですけども、何か今のヨウ素の話聞きますと、本当に買えない者、また買ったにしてもその使いこなしがほとんど知らされていないと。冒頭のアンケート、行政が対策に対してどういうふうな、安全対策だとか避難方法について知っておられますかというアンケートをとったんですが、やや不十分だとか不十分であるのが39%、安全対策ですね。避難方法では余り知らない、全く知らないというのが80%にのぼっておるものですから、そういうふうなこともあわせて、ぜひとも原子力委員会としてお力添えいただきたいというふうに思っております。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

青山さん、どうぞ。

○青山氏 先ほどの高田先生のお話を聞いていて、ぜひひとつ聞いてみたいことがあったので、質問させていただきたいと思うんですけども、鮮魚の仲買で魚を扱っているものですから、

るのが日本人です。カイレ大根事件とかあったわけです。日本人は非常に自分自身で防衛する本能を持っています。だから発電所のタイプも違えば、国民感情的にも汚染したものを拒絶するという意味で、甲状腺がんにはなりにくい社会だと思います。汚染した牛乳をしばらく出荷しないというだけでも防護対策になります。ヨウ素というのは8日で放射能が半減していきますので、一月ぐらい汚染したものを出荷しないだけでも、甲状腺がんを防止できるのです。

屋内退避が放射線災害のときの一番の基本です。屋内に入って、まずドア、窓を閉める、換気扇をとめることです。みんなでどこかにバスに乗って逃げていく、どこかの体育館に集合するんだという発想じゃないんですね。大雨が降って、土石流が来て高台の体育館に逃げよう、これは正しいと思うんです。放射線災害のときはおとなしく家に入って窓を閉めるというのが基本になるんです。

というのは、屋外に汚染物が漂っていますので、そこを逃げていくというのは非常に難しい問題なんですね。そういう避難というのも確かに一つの選択肢としてはあるんですが、放射線災害は基本的には屋内退避なんです。これは世界で過去に生じた核災害を見ていくと、当然そういう結論になってくるんですね。最終的に脱出する、しないというのは次の段階であって、まずそういうものが降ってきたとしたら屋内に退避して窓を閉める。甲状腺防護ということで、屋内でマスクをする。マスクをするだけでチェルノブイリのような事故災害が起こっても、4,000人のうち数人ぐらいしか発がんしないようなことになるでしょう。屋内退避してマスクをして、一月間ぐらい汚染した食品を出荷しない、食べないだけで、島根原発にチェルノブイリ型の事故は起こらないわけですけども、仮に発生しても、松江市の子供が何百人と甲状腺がんになることはないのです。今の基本的な防護対策をとればです。

さらに、ヨウ素剤の問題があります。ヨウ素剤をとらなくても、かなりこれで防護できるんですが。ヨウ素剤の問題はもっと地元の医師の協力を得て、うまい手はずを今後やっていけばと思います。

ちょっと長くなりましたが。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

どうぞ。

○杉谷氏 この懇談会はインターネットを見ますと、立地県ですとか消費地等で開催されているようですが、今の先生のお話を聞くと、甲状腺がんにかかっても死なないからとか、爆発しないからと。我々が実際に3号機が建つこの10キロの範囲の中で生活しておる者からすると決して納得できない話なわけなんです。



もし今原発がというところになったときに、放射線と水とか海水とかに関する影響というのは全くないものなのかどうかという部分をちょっとお聞きしたいなと思って、ぜひお願いします。

○高田氏 環境に多量の放射性物質が放出される場合、例えばチェルノブイリとか、例えば日本で一番身近な、第五福竜丸事件、ビキニ被爆というのがあります。これが一番わかりやすい日本人の例かと思うんです。マーシャルという太平洋の南の方での出来事です。1954年すなわち昭和29年3月1日にアメリカがそこで広島の実験の1,000倍の大型核爆弾の実験をしました。ビキニ環礁というところで空中で爆発するんじゃなくて、いわゆる地表爆発でした。日本のマグロ漁船、第五福竜丸が爆発地点から150キロメートル離れて、まだ夜が明ける前だったんですが、西から太陽が上がってきたぞと証言があるほどに核爆発の火球を目撃しました。

それから4時間ぐらいして雪のようなものが降り出してきたんですね。これが核の灰というものです。今のご質問にあったのに関係するんですけども、そこに核の灰というのは核分裂した放射性物質を含んでいます。この量はチェルノブイリで環境に飛び出した放射能と比べますと、爆発直後は放射能の量が1,000万倍でした。核兵器の場合は非常に多量になります。全放射能の50%から80%が落下しました。第五福竜丸の船の上が白くなってしまって、3センチぐらい積もったというんです。

船員たちは、そうこうしているうちに目が痛くなったり、吐き気を催しました。核爆発があったのというのをすぐみんなわかったので、すぐ投げ網まいて逃げていく、焼津に向けて帰っていきました。その船だけじゃなくて当時とれたマグロというのが大半汚染していました。

それで、南方の海でとってきたマグロを全部廃棄処分にした事件が昭和29年の事件だったんです。これは原子力発電とは全然関係ない、核兵器のことなんですけれども、大量の核の灰が環境に放出されれば、陸地だけではなくて海洋も汚染されるということにはなります。そのときは一時一過性なんですけれども、とにかくしばらく南の海で漁ができなくなってしまったということです。

原子力発電とどう関係あるのかと、これは難しい話で、全く違ったことなので、そんなものでよろしいでしょうか。

○中村コーディネーター あとは高田先生の場合、世界じゅうのいわゆる被爆地というか、放射能汚染地帯というのをほとんど調べていらっしゃるじゃないですか。何年かたってからビキニ環礁へも行かれたんですね。

○高田氏 世界の主要な核被災地を調査の可能な場所は調査して回りました。特に旧ソ連の核

実験場、あるいは核爆発の産業利用と言われたシベリアの爆発とかチェルノブイリ、それとアメリカの方では、マーシャル諸島共和国のビキニとの関係、一番被害をこうむったロンゲラップという島です。調査でわかったことは、災害が起こったときが一番危険で、放射性物質の放射能というのは、時間とともに弱まっていきます。最初の1週間、あるいは一月でかなり人体的に危険な状態がどうにかしのげるかなという状態になります。だから、チェルノブイリのときも汚染した牛乳の出荷を一月ぐらい停止することが大事でした。ですから、一月ぐらい時間がたてば、汚染が自動的にというか、そこで自然法則で低下していく。

それと、ビキニ被災では190km離れたロンゲラップ島では救出されなければ島民全員死んだかもしれない危険な状態になりました。2日後に米軍に救出されたんです。その島に数年後に島民たちは戻りました。私が調査に行ったのは2000年です。その放射線の強さ、さぞかしすごいんだろうと思って行ったんですが、世界じゅう同じ測定器を持って回っていますが、その放射線が一番弱かったのです。世界中を調査して自分の思い込みというのを自分自身が改めた驚きの事実だったんです。広島も非常に今きれいです。全然普通の状態、変わらないんですが、東京も調べてますが、上野公園とか皇居とか調べているんですけども、そういう状態と広島も変わりません。原爆ドームの地層も調べましたけれども、現在は非常にきれいで、もとの状態に戻っているんです。

ということで、核災害というのは悲惨なことなんですけれども、回復可能です。ダイオキシン汚染とか鉛汚染とかの化学汚染との大きな違いです。それらは減らないんですが、核汚染に関しては自然法則でどんどん減っていくのです。ただ、一時困った事態になるんですけれども、ある程度汚染しても農業が再開できたり、そういうことが可能です。

○中村コーディネーター ちょっとこのテーマが長くなったので、ほかのテーマに移りたいなと思いますけれども。

○木元委員 先ほど杉谷さんがおっしゃってくださったことは、本当に重要なことだと思います。昨年の10月に策定されました原子力政策大綱ですけれども、まずいわゆる長期計画を大綱に改めて基本方針をお示ししているという形になっていますけれども、最初にこういう考えを根底に持ってこようということで原子力大綱の中にも書いてありますけれども、「人は誤り、機械は故障する」と。それを大前提に置こうと。その上で第1章の基本目標のところから安全確保を唱えています。第2章も安全確保から始まり、平和利用という段取りで書かせていただいております。その基本方針のもとに事業者の方も多重防護をはじめ、きちんとやってくさっている。

それから、もう一つは幾ら機械がちゃんとしていても、人が過ちを犯す部分ですよ。今回も不祥事があるのは、当事者として、自分は何をやっているかという感覚が麻痺している部分だと思います。その部分もきちんと言わせていただこうと考えておりますので、またご意見がありましたらぜひおっしゃってください。ありがとうございました。

○中村コーディネーター 先ほどの安達さんのお話の中で、これはぜひもう少し詳しく教えていただきたいと思うんですが、合併協議会のことなんですよ。例えば、九州では玄海は唐津に合併せずに大唐津ができましたけれども、玄海町だけが一つ独立してという、そういう形もありました。島根の場合、鹿島は合併協議会を経て、松江市ということになったわけですが、その辺の皆さんの意見のやりとりとか、思い、それから逆に鹿島の方だから、松江の人はどう考えていたのかというのがよくわからないかもしれないですけども、そのあたりのことをもうちょっと教えていただけますか。

○安達氏 自分個人の意見で大変これが正しいのかどうか、うまく説明できるかどうかちょっとわからないんですが、市町村合併、これは平成17年が延長改正の期限切れだったわけですね。市町村合併自体は二十数年前から行政改革の一環として、国の政策として進められてきて、この場に来てというか、平成17年3月というのが合併特例法の適用できるエンドだったんですけども、その期限を区切ってそこまでに何とかしなければ地方の財政、国の財政等がもたないと。私が理解している限りは、財政上の問題がもちろん一番であったと思います。

大合併は明治、昭和と2回やってきているんですが、明治の大合併当時の趣旨目標といえば小学校、そこに子供の教育のために小学校をと、そのエリアの中の行政組織を高めようと。それから、昭和の大学校は中学校ですよ。8,000人規模を目途に中学校を整備すると、これは全国津々浦々に教育を行き渡せるために8,000人規模以上の中学校が一つできる行政単位をそろえようと。

今回の平成の大合併はそれほど教育とか、そういう理念上はちょっと少なく、どちらかといえば経済だとは思いますが、国民自体も生活圏域の広域化ですよ。例えば、私は鹿島町にいつ戻っても同じなんですけれども、発電所から見ると隣の隣、一番松江から遠い位置に住んでいるんですけども、例えばどこに生活をしていても、実際の生活圏域は松江市に勤めている人がほとんどというか7割、6割、もちろん原子力発電所とか、そういうところに勤めている方もいらっしゃいます。漁業者の方もいらっしゃる。

そういう中で、この中国電力の島根原子力発電所が三十数年前に、昭和49年に1号機がこちらに入ると。以後、反対だ、賛成だ、当然あります。全国に比べれば少なかったとは思

んですけれども、そういういろいろと紆余曲折の後、今の合併を迎えて、合併当時は鹿島町自体は2号機からの税収入、固定資産税というのは償却して下がってきますので、税収入から言うと自治財政能力の0.8を持っていたんですね。松江市はその当時0.6、それから他のそれぞれの市町村は0.1から0.4、ほとんど3割自治にも満たないというような状況で、当然鹿島町は3号機がなれば向こう20年以上財政力指数が1より上がるわけですね。

自分で自分の財源は確保できるという状況ではあったのは事実なんですが、合併協議会、あるいは法定協議会、それから任意協議会というシステムを踏んでくるんですが、合併協で各地方自治体の首長さん、鹿島町の町長さん、それから松江市の市長さん、それからほかの8町村の首長さん等が集まって話をする中で、どうしても松江市という大きなものの中で、目には見えないけれども、実際に働き、実際に動き、生活圈域としては松江も鹿島も同じなんですね。ただ、財政整理上鹿島が立地自治体でしたので、当然そこに交付金制度がおける、あるいはそれによって行政ができるという、もちろん県にもおりましたけれども、それが実際の圏域に近づくということで、松江というのは他の周辺市町村から言えば働きに行くところであり、遊びに行くところであり、生活圈域の一部なんですね。

ただ、昔の方は交通手段もないし、なかなかそこには行けない。昔の方にとっては遠い組織だったと思います。どうしても町内、あるいはその中の一地区内というのが頭の生活圈域の範囲である。それが一番大きかったと、そういうことをいろいろな話をするうちに理解というか、そういう気持ちになってきたというのが一番大きかったと。

もう一つはどうしようもないという気持ちと、これは言い方が悪いですけども、松江市自体が14万を超える都市、あとの町村を全部合わせても8万に満たない。14万対何万、鹿島町だけに限ってれば八千数百人しかいない。その方々が将来財源が何十年かは保障されるにしても、生きていくのに周りの方々と、だから自分の住んでいる家にたとえれば家の近所の方々とけんかをして、けんかをするというのは言い方が悪い、おつき合いをせずにそこで生活できるのかと。特に合併前にこうした水道の水源の枯渇の問題、ちょっとご記憶にある方もいらっしゃると思うんですけども、特にライフラインである水、行政の側が保障しなければならぬ生活のライフラインはまず水ですね。それから、水の枯渇が起こったんですね。これについては、水源地が旧松江市にしかない。鹿島町は自主的にそういうものを持っていない。当然、その料金云々あって、お金を払ったりできますけれども、その保障がまずできない。これも大きな理由だったと思います。

それから、今回原子力のことに関して言えば、原子力の恩恵を一番受けていたのは、過去お

金の面、財政の面、今の経済効果の面は旧松江市の方に大きいと思うんですけども、行政上に交付金であるとか固定資産税であるとか、そういうものの恩恵を受けていたのは旧鹿島町であって、現在はそれは当然松江市の方になるわけですけども、それをここの中だけで判断できるものかと。当然、松江の方から見れば揶揄される面もあるでしょうし、鹿島町から見れば「おまえは鹿島町か」と。私もさっき質問に立たれた方と同じく地元の大学に行ったんですけども、全然何もわからずに地元の大学の学部へ行って、そこの教授の先生に「きみは鹿島町か」と、「ホテル並みの庁舎を建てやがって」と怒られましたけれども、それは本当冗談で聞いていただければいいんです。そのぐらい気持ちとしては、周りから見ると鹿島町自体がおまえのところばかりいい扱いを受けているんじゃないかという意識はあったと思います。

ただ、こうして合併して、またよくこれからまだ合併ししなでするので、よく理解をお互いにし合って、特に政策も安全ということに関しては松江の方もいらっしゃいますけれども、はっきり言えば我々がもっと近いわけですね。2キロ、3キロの位置にいるわけです。それが知識がないからわからない、ただそれだけではないわけです。鹿島町に30年おれば、私の父は反対者であったかもしれないけれども、漁業者であったかもしれないけれども、私の親父はまた違った形が生まれ、またその下の代になって、30年といえは3代来ますので、自分の家のおじいさんは反対者だったけれども、息子は賛成者なんだと。あるいは親父は賛成者だったけれども、息子は嫌だというようなお互いの交流ができてくるわけですね。そこに基づいての30年の信頼関係を新市の皆様に理解してくださと言われてもちょっと難しいんでしょうけれども、少なくとも尊重していただいて、意見を言う機会を与えていただければと思います。原子力に関して、ちょっと絡めて申しわけなかったですけども、そういうことです。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

私にとって知りたい情報でした。ありがとうございます。

吉岡さん、どうぞ。

○吉岡委員 簡単に言いますけれども、フロアから3人しか発言されてない。しかも事前の打ち合わせでは1人3分で鐘を鳴らすということだったんですけども、長い話が非常に多いので、あと残された時間はできるだけフロアへ振ったらどうかと思います。

○中村コーディネーター そのつもりです。

早速、本当に予定した時間が残り少なくなってまいりましたので、ぜひフロアの皆様から生の声を聞かせていただきたいと思いますというふうに思います。

○イシハラ氏 松江市北母衣町に住んでいますイシハラと申します。

私が所属していますNPOがあるんですけども、全国の原子力発電所の立地地でトークサロンを開催しています。2年前に実は松江でも開催いたしました。そのときに、実は150人程度なんですけど、地元の方と一緒に原子力について話し合おうと思ったんですけども、県庁に実は相談に行きまして、これはチラシをつくるに当たって後援会を入れたかったんです。県庁の方で実は原子力に対してのところの担当と環境政策課と資源の方と三者いろいろ論議されて、非常に原子力は難しい問題だから、ちょっとできれば内々でしてくれないかみたいな感じだったんです。

こんな暴露話をするわけじゃないんですけども、そのときに思ったのが非常に原子力という話が表立ってできない。これは私自身も思うんですけども、皆さんに原子力という話をしたときに、まず最初に怖いよねと言われるんですね。だから、私はずっと松江に住んでいて、32年間発電所第1号機からずっといるわけですけども、原子力について安心、安全も含めて正確な知識というのが得られてないんですよ。電力会社の方からはいろいろとお聞きします。

ですけども、そのトークサロンを開催するに当たりまして事前勉強会をさせていただきました。そのときに放射能の話とか、だからワカメをそれからずっと食べているんですよ。医療関係の放射線の先生がいらっしゃらないということも全部お聞きしました。だけれども、一般の方はこういった勉強会ということはないわけですよ。

こうやって考えていくと、いい悪い以前に共存しているということで、みんなが正確な情報を共有しないといけないなと思います。だから、同じテーブルでつくような論議をぜひしたいと思いますけれども、そういう機会というのが非常に難しいんですね。これはだれが音頭をとるかということなんですけれども、この間プルサーマルのときは結局プルサーマルは委員会とか、いろいろ呼ばれた方が来られるんですね。市の方でも県の方でもそうなんですけれども、シンポジウムは参加させていただいたんですけども、そういった原子力の原子ということ自体がないんですね。核融合どうのこうのという話も勉強する機会もありませんし、よく今の国の政策の中で省エネ、新エネから原子力という三本柱がありますけれども、私は省エネの仕事をずっとしておりまして、省エネがいかに難しいかとよくわかっています。何年しても進みません。そういう中で、原子力というのは進めていかないといけないというのはよくわかるんですけど、現実問題原子力をどうやって伝えていくかというのがわからないんです。特に原子力基本法について、私はお伝えすることができない。そういった関与をぜひ国を挙げてしていただけたらなというのが実感です。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

これは原子力委員から当然一言コメントあるでしょう。

○木元座長 とてもいいご意見、でも悩ましい部分があるということはよくわかりました。

そして、NPOとして活躍していらっしゃる。その情報の交換というものを私たちも知りたいし、今こうやってご報告いただいて、私たちがまだやることがあるなど、市民参加懇談会ももうちょっと活用できるなというふうに思いましたので、またポイント、ポイントで機会を見つけてやりましょう。お願いいたします。

皆様方の資料の5ページにあると思うんですけども、地域での懇談会開催という(2)で書いてあるところがあります。そのところに上から3行目になりますか、「広聴」と「広く聴く」という言葉を使わせていただいています。これはここにいらっしゃる碧海さんたちと平成12年から初めて取り上げているんですけども、今まで公に聴く公聴会というのはあるんですが、広く聴くという言葉は余り目につきませんでした。でも、この広く聴くというのは広辞苑にちゃんと出ています。公に聴くは出てないんですが、広く聴くは出ておりますので、広く聴く、皆様方の声を聴くことによって、ある程度の展開ができるし、そして何かこれを理解していただきたいというときには相互理解じゃないと理解できません。その相互理解を図る上でも、この広聴の精神でいきたいと思うので、その意味で一緒に市民参加懇談会の中でやらせていただければうれしいなと思います。

ありがとうございます。

○中村コーディネーター イシハラさん、ありがとうございました。そういう場を本当に少しでも多くつくることができたらなと思っております。

ほかにご意見、ご質問おありの方。

○ナイトウ氏 松江市の隣の東出雲町に住んでおりますナイトウと申します。

自分はちょっと途中から入ってきたもので、議論の全体をうまくつかみとれてないので、稚拙な意見でしたら大変申しわけございません。

最初、こちらで聞いた話だと、原子力が漏れても安全ですし、また原子力に汚染された食糧というのは流通されないから安全なんだというふうに話されましたけれども、実際の食肉の偽装問題ですとか、牛乳の洗浄されてなかったものが使われていて、それがまだ氷山の一角だという、ただの食糧でもそういった安全性というものが問われているにもかかわらず、果たしてちゃんと放射線汚染されたものが流通からカットされ得るのかというのは、自分はまだちょっと疑問に思わざるを得ません。

また、それと中国電力からいろいろこうした懇談会に参加して、端で聞かせていただいて、中国電力さんからもいろいろ資料が出てくるんですけども、大抵は墨塗りで我々には全く一体これが何の情報なのかというのがわからない状態でしか出てこないの、情報公開が十分でないにもかかわらず、我々を信じてくれと言われても、信じるための資料すら自分たちには提示されていないという状態で、幾ら無条件承認してくれと言ってもそれは筋が違うのではなからうかと思えます。

それと、これは古い資料なんですけれども、今から15年ほど前、自分は高校に通っておりました。そのときに使われた高校公民で現代社会という科目があるんですけど、そこで使われていた資料集の中に、実は日本の発電量というのは当時は火力と水力ですね。火力、水力ですべての電気が賄われていて、原子力というのは一応発電はしているんですけども、それは全く今原子力発電所をすべてとめても十分賄えるだけの電力は発電されているというふうに出ているんですね。それだったら、今はどうなっているかわかりませんが、もしそれが当時と同じ比率であれば、そもそも原子力発電所自体存続の意味はないのではなからうかというふうに、ここ15年以上疑問に思っております。

以上です。

○中村コーディネーター それはすごい教科書ですね。冗談で聞くことではこれはないので、ナイトウさんはずっとそういうふうに信じ続けて学校で勉強したことですから、思っていられやうと思いますが、少なくとも今の状況は違うというあたりを木元座長。

○木元座長 私も古い人間ですけども、その教科書も多分あったらと思うんですが、その後いろいろな状況が教科書の中でも語られている部分があります。教科書は教科書で問題があるんですけども、情報としては、例えば新聞でエネルギーの情報は多分お目にとまっていたんじゃないかと思うんですが、今日本全体で総発電電力量の35%近くは原子力なんです。地域によっては多少のずれがありますが、例えば東京電力管内だと40%とか、関西電力の場合は60%近いとか、いろいろあるんですが、四国だとか九州も40%になってきました。

そういうような状況の中で、今原子力委員会の政策大綱の中でうたいましたのは、2030年以降も原子力発電による電力の供給量は30%から40%程度以上は占めるだろうと、こういう予測を立てております。それは先ほどからお話が出てきている資源の問題、価格の高騰もありますけれども、環境問題もそこの中に入ってきております。

それから、ドイツが原子力発電をやめようといひましても、あそこの国は大陸の中で、いわ



ゆる送電線が北から南とつながっておりますので、いろいろな国から融通がきくわけですね。特にフランスの原子力発電所からドイツは買っています。そういうような国情の違いもあるので、原子力発電はこれからも、安全に留意して健全に運転していこうということで、基幹電源としてベースに原子力発電を安定的に置いて、夏とか冬とか足りない分は火力などで補っていく。そういう形を各電力さんもとられて、努力をなさっていらっしゃるんですね。ですから、新しい情報をもしよろしかったら後でお届けさせていただきます。それでよろしいでしょうか。

ありがとうございました。でも、随分貴重な教科書ですね。今持ってらっしゃらないでしょうね。見たいな。公民。

○中村コーディネーター 趣旨はそういう趣旨だったんですね。

○木元座長 だけど、そのころから総発電電力量が随分ふえていますから、同じ30%でも発電電力量は違いますし、後でお互いに話しましょう。

○中村コーディネーター 多分、そのところは全然違う趣旨の内容で書かれていることなんだろうと思います。そういうことなら、そういう考えの人が書いた教科書というのもあり得るのかなとは思いますがけれども、わかりました。

○曾我部氏 将来、ベストミックスというか、30%を維持しようとするのであれば、なぜ大学に原子力という看板をかけさせないんですか。

○木元座長 かけさせないんじゃなくて、それは大学の自主。

○曾我部氏 自主なんだけれども、それを国策としてフランスはやるから、みんな市民にちゃんと説明してやっていけるわけですよ。日本は日影にしまっているから、原子力は悪い、悪いというような言い方にしかならないんですよ。

多くの人が聞いたときに、先ほどの伊シハラさんが言ったようにシンポをやろうとしたら怖いというイメージだけしかしてないわけですね。正しい知識をそういう面でするためには、大学にちゃんとした看板を立てるということを原子力委員会に。

○木元座長 後で委員長にフォローしていただきますけれども。

○曾我部氏 委員長自身のところからも看板が消えているわけですから、非常に情けない話です。

○木元座長 でも、原子力委員会は厳然としてありますし、原子力という言葉も使いますし、最初に私のごあいさつで申し上げたのは、原子力を普通の状況で普通の言葉で、今日の原子力はねと語れる状況をつくりたいと、それが私の考えた原子力委員会における市民参加懇談会のコミュニケーションのあり方なんですね。だから、ひそひそ語る原子力は私は真っ向から否定

しています。堂々と語りたいですね。

○中村コーディネーター 曾我部先生のおっしゃるのは、でも当然だと思って、実は今日も多分原子力立国についての説明が福井県のどこかで行われていると思うんですけども、言うように原子力立国って宣言したならおっしゃるとおりだと思いますよね。そうじゃなきゃ論理一貫してないですよと私も思いますけどね。

○木元座長 減っているところもなくなったところもありますが、例えば福井県はちゃんと原子力を掲げましたから、だんだんふえるだろうと期待はしております。原子力政策大綱があって、そしてエネ庁の原子力部会で原子力立国計画を出しました。今度新国家エネルギー戦略の中でも、きちんとそういうのを踏まえていると。今の状況はそうなっていて、それを受けてエネルギー基本計画がまたできると、こういう形ですので、その中にも戻すということが入れればいいですね。

○曾我部氏 だから、電源開発費をばらまくよりも、大学にそういう金を少し一部でもいいからやれば、大学の看板を掲げてくるんですよ。

○木元座長 いいご意見です。

○中村コーディネーター 大学も独立しなければいけない状況の中でね。

○曾我部氏 結局、電源開発で地元にとす金というのは、人間の意欲を失ってしまっているんですよ。やる気をなくしてしまう。だから、合併しないといけないので、鹿島町は単独でできないようになってしまっている。だから、もう少しそういう点で生かす力を利用しないと。

○木元座長 ですから、原子力発電所がある、あるいは原子力施設があるときに、それを資源として、あるいは資産として交付金を含めてそれを活用して、何か新しい方向、自分たちが活用させる方向に行けばいいんですよ。

○曾我部氏 有能な技術者が実際にいる間に次の世代を育成していかないとだめなんです。

○木元座長 そうですね。確かにおっしゃるとおりです。

○中村コーディネーター ありがとうございます。

本当に皆さんの貴重なご意見を伺うことができまして、予定の時間が来てしまったんですが、最後に近藤委員長、今日は公務でちょっと第1部の頭の方はおいでになられなかったんですけども、その後ずっと聞いていただきました。ご感想も含めてごあいさつをお願いします。

○近藤原子力委員長 こども公務ですので、よろしくをお願いします。今日は国会で日本は非核三原則を遵守していることによって原子力活動ができていないのか、そうだろうというご質問というか、確認のために呼び出されまして、おっしゃるとおりでございますというか、

日本の原子力研究開発利用活動が平和の目的に限定されると法定されているところから、それを前提にして国際通商が成立している等の原理、前提条件ということについてご説明申し上げて参りました、そのため、少し遅れてしまい、皆様のご意見を全部は聴けなかったこと、真に残念に思っている次第です。

それはさておき、まずは、今日、大変お忙しいところ、このような時間帯の会合にご参加いただきました20センチぐらい高いところに座っておられる皆様に心から御礼申し上げます。また会場にいらしています皆様におかれましては、お仕事の終わった後、あるいはこれからお仕事のある方もいらっしゃるのかと思いますけれども、5時半から8時半までの3時間、原子力に関して知りたい情報は届いているかという問題提起について一緒に考える時間を私どもと共有していただいたこと、大変ありがたく、感謝申し上げます。

私は前半の議論を伺っていませんので、間違ったオブザベーションになってしまうのかもしれませんが、今日は、このテーマの知りたい情報は届いているのだろうかという私どもの問題意識に関して、今後の私ども原子力委員会の活動の生かしていく貴重なご意見をたくさんお聞かせいただいたと考えております。そう申し上げた上で、2、3の点についていま考えているところを少しく申し上げさせていただきます。1つは防災対策について情報の不十分さについてのご指摘があったことです。

私が大学を卒業して初めて安全行政のお手伝いをしたのがTMI事故の起きた後の防災対策の整備に関して、事前に防災計画を準備しておく範囲を8キロとか10キロとかに決めたいが、この数字をどういう根拠でどう決めるのがよいかという課題です。大事故がおきても、まずはある範囲について防災活動をスムーズに行えることが肝心で、その外側については、その状況を見ながら臨機応変に考えていけばよい、そういう時間があるだろうとして、そのあらかじめ防災計画を立てておく範囲を、確率論的安全評価の結果を踏まえて極めて発生確率は小さいけれども大量の放射性物質が出る事故を考えて、それが風の吹き方も考えてどのあたりまで高い被ばく線量をもたらすかを計算しまして、この範囲までが肅々と避難できることが大事という計算結果を提出しました。それから、防災対策についてもう一度大きな議論をしたのがJCO事故の後、防災対策の責任体系、従来は自然災害対策のアナロジーで、県というか、自治体が地方の住民の安全に責任を持つ仕組みになっていたのですが、専門家集団の動員、これは自衛隊とかいろいろあるわけですが、そういうものの動員を考えると総理大臣が責任をとるものに変え、あわせて国と自治体が一緒に防災対策の進め方を総合するセンターとなる場所、今オフサイトセンターと呼んでいるものですね、これを整備するべきという議論、これもお手伝いし

ましたが、そんなことで防災については個人的には思いがあります。今日お話を伺って、これについては少なくとも今どういう考え方でこういうことをやっているんだということについて、最も関係が深い地域住民の皆様にかちんとしたことが伝わるようなことをしなきゃならないという感想を持ちましたので、再三、木元さんがおっしゃられましたけれども、関係者、原子力安全・保安院、あるいは原子力安全委員会にこのことをお伝えすることをお約束いたします。

それから、一般的に知りたい情報が届いているかということでこういう催しに参加して発言してもやり取りがなく、伝えますでは、効果感に欠けるという思いをもたれたように思いましたことにつきましては、我々は原子力基本法で原子力政策について企画、審議、決定するという責任を負っていますけれども、国会では、本来政策を決めるのは自分たちなのに、おまえたちに任せているんだから、しっかり国民の意見を聞いてやってくれとご指導をいただいておりますこともあり、政策決定にはさまざまな形で国民の皆様のご意見を聴くようにしています。たとえば、原子力政策大綱を決定するまでには三十数回ご意見を聴く会を行い、意見募集、パブコメと言われているものについても審議を始める前と真ん中と、そして終わりと3回にわたって実施し、三千数件ぐらいのご意見をいただきました。そのようにして、国民の皆様の負託に答えているつもりです。

ただ、私どもは、政策を決める機関で、行政の実務をやる機関ではありません。で、原子力政策大綱では、具体的なことで皆様との接点が私どもよりは多い行政の実務の担当者に対して、顔の見える行政を行うべしとしたところ、やってくれということを申し上げたところ、少しずつそのことの重要性についてのご理解が進んだせいでしょうか、いただいているかと思えます。保安院が安全の説明の会を立地自治体で開催するやるようになったとか、経産省が最近決定した今原子力立国計画について説明会を各地で開催しておられるとか、少しずつそういう問題意識をお持ちいただいて取組がなされていると。あるいは政治家もまた立地地域に出向いて、直接ご意見を聴くということをやっておられる。そういうことがあるのですけれども、私ども、まさしく、ここでこのような会合をやってみますと、まだまだ聴きたい情報が届いていないということがわかる。そこで、こういうことだよということを関係各位、行政の担当者に伝えて、改良改善をはかっていただく、そういう趣旨だということ、すでにお気づきいただいていると存じますが、念のため申し上げます。

ですから、情報公開が不足というご指摘がありましたけれども、どんな情報を共有するべきなのか、そのことに対する相互理解が不足しているということなんだと、こういうところでおっしゃっていただくことが大事。ですから、さきほど吉岡さんがもっとたくさんの方から意見

を伺うべしとされたことはそのとおりなのです。

ですから、繰り返しになりますが、我々はご意見を聴く会をやりまし、同時に書面で意見募集をしていますし、ご意見の投書も歓迎しているところです。私どもとしてはいただいた語意見に関しては、誠心誠意行間を読もうと努力して、その思いを行政の設計に反映していくという作業をしているつもりですから、こういうことを考えているんだということをぜひ、県に言って何となく対応が悪かったら、ぜひそのことも原子力委員会に言っていただくとよろしいと思います。原子力委員会は何でも聴くという、御用聞きに徹するということになっていますので、何かありましたらぜひ原子力委員会にお寄せいただくということをしていただくと大変ありがたいというふうに思います。

情報技術の時代、情報はホームページに出してみたりしているんですけども、でも相互交流の場が少ないことは確かです。限られた資源の中でどうやってその場を設定するかというと、声がありそうなところに行ってやるという、そういうことになるんですね。ですから、いろいろな形でぜひご意見をさせていただくと、今後はそこについてみようかとなるのです。よろしくをお願いします。

最後に一つだけ大学の問題で、原子力科がなくなったということについてご批判をいただきました。私は1988年でしたか、東京大学原子力工学科の名前を変えたんですけども、学科をなくしたわけではありません。なぜ変えたのかですが、大学というのは就職させられない卒業生をつくってはいかんです。親御さんが一生懸命努力して教育した子供さんを受け入れて、教官が勝手に好きなテーマで教育して卒業させて、しかし、そんな専門分野の教育を受けた人はいないということで路頭に迷わせては困るわけで、必ず人材マーケットがある分野に学生を出さなきゃならないんです。1986年に人材市場の調査をしてみて気がついたことは、原子力産業は安定期に入って、成長期には大体年間400人ぐらいの学卒の需要があったんですけども、それがすぐに年間100人ぐらいになるとわかったのです。そうすると、全国の主要大学に定員40人の学科が10あるとして毎年400人の卒業生が出るけれども、その4分の1にしか、原子力分野に就職できないことになるんですね。そこで、原子力も含めていろいろな分野で活躍できる卒業生をつくることにする、原子力工学の強みは物事を系統的に考えること、それから量子工学という非常に最先端のマイクロな問題を考える能力、この2つをあわせ持った学生だということに対応可能な分野を拡大しておくことが重要と考えまして、それを表に出してシステム量子工学科という名称に変えたのです。ですから原子力のマーケットがあれば、当然学生さんがそこへ就職すると、そういうことなのです。マスコミはなくなった、

大変だという、そういう表現をされるんですけども、実際はお預かりした学生さんを全員ちゃんと就職させてあげることができる仕組みに変えたということです。でも最近になって、今度は福井県では福井大学に原子力のための学科をつくるのが地元の産業のために有意義ではないかということで、それが今つくられています。ですから、国が学科のあり方について、そういう学科はだめとか禁止ということはありません。それぞれの大学の創意工夫でいろいろな学科が生まれたり、変化したりしているのが実情です。

原子力委員会としては、産業界なり皆さんに将来の人材需要の見通しを考えてください、そしてこれだけの需要があるという情報を大学に送ってくださいと、そうすると大学が準備できますからと。あるいはほんとにほしいのだということで、その分野の教育を受ける人には奨学金を出すとか、そういう大学に対して教育研究費用を出すとか、そういうことが大事だということをお願いしています。

ちょっと長くなりました。もうやめろという合図が出ていますので、これでやめます。本日は大変勉強させていただきました。委員会を代表してお礼申し上げます。まことにありがとうございました。

○中村コーディネーター 事務方がベルを鳴らすのを忘れたようで、大変失礼いたしました。

各地で開催しておりますけれども、近藤委員長がこれだけ長くしゃべったというのは初めてのことでございまして、それだけ皆さんのご発言が非常に刺激的だったのではないかと私は受けとめております。

予定の時間をちょっとオーバーしてしまいましたけれども、7人の発言者の皆さん、そして会場の最後まで熱心に参加していただいた皆さん、本当にありがとうございました。これで市民参加懇談会 in 松江を終わらせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

○事務局 どうもありがとうございました。

これをもちまして市民参加懇談会 in 松江を終わらせていただきます。

最後に事務局からお願いがございまして、本日お配りいたしました資料の中にアンケートがございます。お手数ではございますが、ぜひご記入いただきまして、お帰りの際に係の者にお渡しいただければ幸いです。

皆様のご意見により、今後の市民参加懇談会をより充実したものにしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

お出口は大変混み合いますので、お気をつけてお帰りくださいませ。

本日は当懇談会にご参加いただきまして、どうもありがとうございました。